第３節　ＳＤＧｓ語学力向上プログラム

１　グローバル・コミュニケーションＡ

（１）開設理由と目標

ア　開設理由

昨年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定校となり、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成することを目指し、語学力の育成にさらに力を入れていく必要がある。

そのために、商業科及び情報処理科には「グローバル・コミュニケーション A」を開設し、これまでの書くことと話すことを主眼に置いた授業内容をさらに深化させ、ＳＤＧｓについて学び、その観点から英語でまとまった文章を書いたりディスカッションしたりする能力を身に着ける。

イ　目標

商業科・情報処理科の１年生を対象に、日常の様々な場面・話題に加えＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の観点に基づき自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の基本的な表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する基礎的能力を養う。また、様々な場面・話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（２）　授業の様子

商業科・情報処理科１年生の１・２学期の授業では、基本的な文法事項習得後に、その表現を使用して、自ら英語で発信する機会を増やし、学習した内容が実際に使えるものである実体験を多く持たせることに重点をおいた。

その取組の一環として、学期ごとにテーマに沿ったスピーチを、既習の文法事項を使いながら生徒たちは原稿から作成し発表した。テーマは、英語に苦手意識を持っている生徒もいるので「自分の好きなこと」や「自分の大切なもの」（写真やもの（アイテム）を示しながら）についてのスピーチを実施した。評価は原稿内容（ライティング力）と表現力（スピーキング力）に基づき行った。

また、授業の初めには today's phrase として、日常よく使われる英語の表現を提示し、その表現に派生する社会情勢について話をすることで、世界へ視点を向ける機会を設けた。例えば、アメリカで大統領選挙が行われているときには、アメリカでの人種差別や銃社会についての新聞記事やニュースを提示し、世界には様々な価値観があることについて考えた。この科目の目標であるＳＤＧｓについては、環境に係わる用語の学習や、英作文の課題として貧困や世界平和を取り扱った英文をパートナーと表現した。教科書上の文法事項としての理解にとどまらず、その表現を発信することに興味を持って取り組んでいた。

（３）　成果と課題

商業科と情報処理科１年生の「グローバル・コミュニケーションＡ」においては、まずは、英語は世界とつながる言語であり、英語を発信することを身近に感じてもらうこと、世界の情勢に目を向けてもらうことに日々の授業で取り組んできた。スピーチでは自分に係わる題材であったため、前向きに英語を「書くこと」「話すこと」に取組み、英語を話すことへの苦手意識を減らし、自信につなぐことができた生徒が多かったように感じた。

今後の課題としては、英語の発信を身近な題材だけにとどまらず、この科目の目標でもあるＳＤＧｓに興味関心を持ち、生徒自らが考えた意見を英語で書き、話す力を養うための年間の授業の構成を、教科書の学習と平行して考えていく必要がある。

２　グローバル・コミュニケーションＢ

（１）　開設理由と目標

ア　開設理由

昨年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定校となり、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成することを目指し、語学力の育成にさらに力を入れてい

く必要がある。
そのために、国際科には「グローバル・コミュニケーションＢ」を開設し、これまでの書くことと話すことを主眼に置いた授業内容をさらに深化させ、ＳＤＧｓについて学び、その観点から英語でまとまった文章を書いたりディスカッションしたりする能力を身に着ける。

イ　各学年の目標

（ア）国際科１年生

国際科１年生においては、英語での基礎的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着けることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（イ）国際科２年生

国際科２年生においては、１年次のグローバル・コミュニケーションＢで身に着けたスキルをさらに発展させ、英語での標準的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着けることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や多岐にわたる話題に触れることによって、文化の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

（ウ）国際科３年生

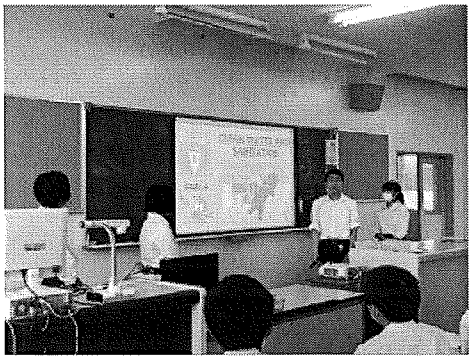
国際科３年生においては、１・２年次のグローバル・コミュニケーションＢで身に着けたスキルをさらに発展させ、英語での発展的発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着け、場面に適した表現を使用できるようになることを目標とする。テーマについては、日常の様々な場面・話題に加え、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の理論や考え方を扱う。扱うテーマについて、ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う。また、様々な場面や多岐にわたる時事的話題や社会問題に触れることによって、文化や考え方の違いについても理解を深めようとする態度を育てる。

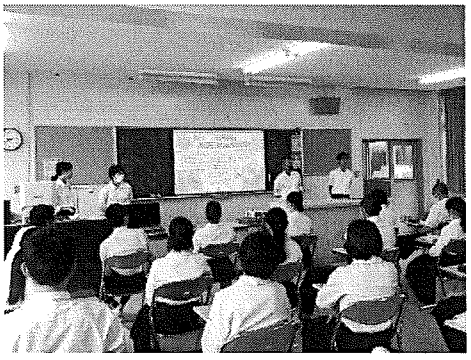
（２）　授業の様子

国際科３年生の「グローバル・コミュニケーションＢ」の授業では、１学期にＳＤＧｓ１７の目標についてグループ・プレゼンテーションを実施した。クラスを生徒４名一組のグループに分け、各グループが自分たちの興味・関心のあるＳＤＧｓの目標を一つ選び、その目標について

１．その目標が設定された背景を伝える
２．現在どのような問題が実際に起こっているのかをデータとともに示す
３．その目標を解決するために、私たちは何をすべきかを提示する

という内容のプレゼンテーションを行なった。各チームは仲間とともに必要なデータを収集し、パワーポイントのスライド４枚にまとめ発表した。





（プレゼンテーションの様子）

評価については、グループディスカッションではあるが、個人の英語力・表現力・意欲・関心を主に評価する評価ルーブリックを使用し実施した。

どのグループも、自分たちの選んだＳＤＧｓの目標を説明するために役立つデータをインターネット等で収集し、それをパワーポイント資料に落とし込み、一生懸命発表した。また、聞いている生徒達も他のグループの発表に真剣に耳を傾け、ＳＤＧｓについて深く学ぶきっかけとなった。

Presentation (with PowerPoint) Rubric No.____ Name_____

	Needs Improvement (1 pts)	Satisfactory (2 pts)	Good (3 pts)	Excellent (4 pts)
Grammar / Vocabulary	Student was difficult to understand and had a hard time communicating their ideas and responses because of grammar mistakes.	Student was able to express their ideas and responses adequately, but often displayed inconsistencies with their sentence structure and tenses.	Student was able to express their ideas and responses fairly well but made mistakes, however they didn't interfere with our understanding.	Student was able to express their ideas and responses with ease in proper sentence structure and tenses.
Pronunciation/ Fluency	Student was difficult to understand, quiet in speaking, unclear in pronunciation.	Student was slightly unclear with pronunciation at times, but generally is fair.	Pronunciation was good and did not interfere with communication	Pronunciation was very clear and easy to understand.
Content	The content is rather boring.	The content contains some interesting information.	Student seemed to have researched well to make this presentation.	Student researched well and the content has a lot of interesting information.
Memorization	Student's speech wasn't conducted without the script.	Student had difficulties giving speech with memorization, and the speech contained little interesting information.	Student memorized most of the speech and it contained some interesting information.	Student memorized all and the speech contained enough and intriguing information.
Interest / Willingness	Student doesn't seem to be interested or willing to present in English at all.	Student doesn't seem to be interested in presenting in English and she/he doesn't try to use much nonverbal communication.	Student seems to be interested in presenting in English and uses proper nonverbal communication (gestures, facial expressions, nodding etc).	Student is interested in presenting in English and he/she is willing to express him/herself using appropriate nonverbal communication (gestures, facial expressions, nodding etc).
Visual Aid (PowerPoint)	PowerPoint wasn't created or used at all.	Although PowerPoint was used, it was not very helpful for audience to understand the presentation.	PowerPoint was created and used relatively well and it was helpful.	PowerPoint was created well and used very effectively. It helped audience understand the presentation.

（プレゼンテーションを評価する際に使用した評価ルーブリック）

（３）　成果と課題

国際科の「グローバル・コミュニケーションＢ」においては、科目の目標に「英語での発信力（話すこと［やり取り］、話すこと［発表］、書くこと）を身に着け、場面に適した表現を使用できるようになること」、および「ＳＤＧｓの観点を踏まえ自らが考えた意見等について英語で書いたり話したりする際の表現を修得し、それをコミュニケーションに活用する能力を養う」ことを掲げ、日々の授業に取り組んできた。「英語表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の検定教科書を使用し、さまざまな表現方法を学びつつ、ＳＤＧｓの観点を取り入れプレゼンテーションやディスカッションを行えるようになってきたことは、非常にチャレンジングではあったが、生徒には大きな自信につながり一定の成果があった。また、この授業を通して生徒達は、「話すこと」及び「書くこと」において、ある程度のまとまった量の英語を発信することができるようになってきた。

今後の課題としては、量だけでなく、発信する英語の質的向上である。文法的により正確な英語を使えるようになることとより論理的に話を組み立てる能力を育成できるよう、授業に改善を加えていきたい。

３　英語セミナー

（１）　目標

英語運用能力の向上をめざす活動の一環として、国際科の生徒を対象に学年別で英語セミナーを実施している。他校に配置されているＡＬＴを招聘し、様々な活動を英語で行なうことを通じて、積極的に「聞き」「話す」ことにより、英語の世界に慣れ、英語運用能力の向上を目指す。また、様々な国出身のＡＬＴとのふれあいを通じて、広く世界への関心を高め、国際感覚を身につける。

（２）　英語セミナーの様子

ア　国際科３年生英語セミナー

（ア）日時及び場所

日時：２０２０年７月１１日（土）
　　９：３０～１５：３０

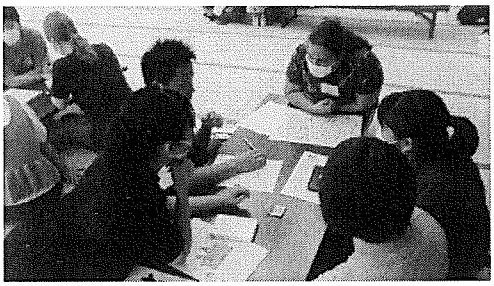
場所：二見老人福祉センター

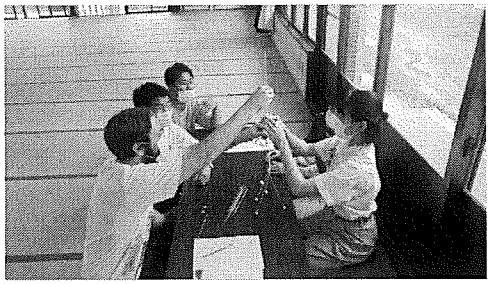
（イ）内容と様子

３年生を対象とした今回の英語セミナーは「Around the World」をテーマに、世界の文化、習慣、食べ物等をさまざまな活動を通して学ぶことができるよう工夫した。本校生徒４人～５人につき１名の外国人指導助手を配置し、グループ対抗でクイズ

（セミナー後の全体写真）

やスキットを行なった。使用言語は英語のみに限定し、１日英語漬けの生活をすることで、日頃の英語の授業で学んだ表現を実際のコミュニケーションとして活用する楽しさを実感することができた１日であった。





（グループ毎にさまざまな活動に取り組んでいる様子）

（ウ）生徒の声

・コロナウィルス感染拡大の心配もあったが、何とか高校最後の英語セミナーが開催されて良かった。ＡＬＴの先生方がとてもフレンドリーで、楽しみながら英語を使う機会が多くあっという間の１日だった。

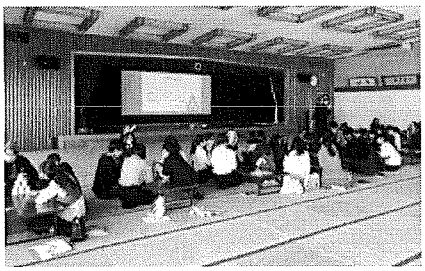
・授業で学んだ表現等を実際に使用することで、授業の英語と実生活の英語との距離が縮まり、とてもよい勉強になった。

イ　国際科２年生英語セミナー

（ア）日時及び場所

日時：２０２０年１０月３１日（土）
　　９：３０～１５：３０

場所：二見老人福祉センター



（グループ毎にさまざまな活動に取り組んでいる様子）

（イ）内容と様子

２年生を対象とした今回の英語セミナーは「Halloween」をテーマに、さまざまな活動を通して世界でハロウィーンがどのように行なわれているのかを学ぶことができるよう工夫した。本校生徒４人～５人につき１名の外国人指導助手を配置し、グループ対抗でクイズやスキットを行なった。使用言語を英語に限定されていたので、試行錯誤しながら英語で自分の意見や気持ちを伝え合おうとする姿が見られた。日頃の英語の授業で学んだ表現を実際のコミュニケーションとして活用する楽しさを実感することができた１日であった。

（ウ）生徒の声

・１日ゲームを通して多くの単語や外国の文化を学べて良い経験になった。また、自分から何かを発信しないといけない環境にあるため、自分から積極的に英語で話しかけることができるようになった。

・普通の授業とはちがう本物の英語でコミュニケーションが取れてよかった。
初めは緊張したけどＡＬＴが和ませてくれてすごく楽しかった。

・コロナウィルスの影響で海外との交流が出来るイベントが激減し、半ば諦めていた面もあったが、しっかりと対策を行なった上で工夫すれば海外の方と英語を使って交流することが出来ると気づけた。だからこのイベント以降は、自分から参加可能なイベントや企画を探し、出来るだけ多く参加出来るよう時間を作った。また、オンラインにはオンラインの魅力があるが、やはり対面で会話を行なうことの意義を理解できた。

（セミナー後の全体写真）

ウ　国際科１年生英語セミナー

１年国際科に在籍する生徒を対象にした英語セミナーを２０２１年２月６日（土）に計画していた。しかしながら、全国的な新型コロナウィルス感染拡大の影響をうけ、関東圏を中心に緊急事態宣言が再発令され、本県においても１月１４日から２月７日の期間に緊急警戒宣言が県独自で発令された影響により、校外からＡＬＴを招聘するようなイベントの自粛が求められ、残念ながら中止することとした。

４　校内外の英語スピーチコンテスト等への参加

（１）　スピーチコンテスト

ア　三重県高等学校英語教育研究会主催英語スピーチコンテスト

（ア）取組

新型コロナウィルス感染拡大の影響を受けて、各種スピーチコンテストの中止が決定される中、全国高等学校英語教育連盟主催のスピーチコンテスト（全国大会）も非開催となった。したがってこの全国大会の予選という位置づけの三重県高等学校英語教育研究会主催の英語スピーチコンテストも中止になるのではと思われたが、日頃の英語学習に一生懸命取り組んでいる高校生が発表をする機会になるということで、幸いにも開催が決定された。今大会の予選は送付した音声データで行なわれ、予選を通過した１３名が１０月１７日（土）に開催される本戦に出場した。

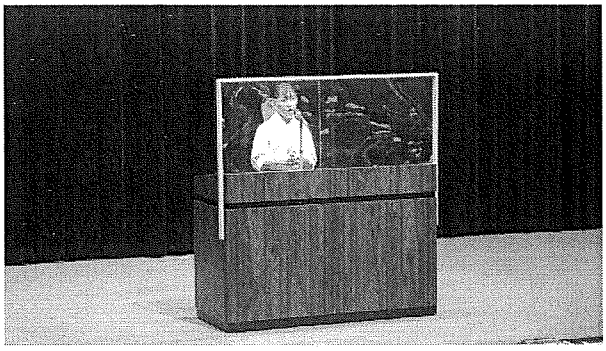
本校では夏休み前から、この大会に出場を希望するＥＳＳ部に所属する生徒４名が、スピーチの原稿作成に取り組み、何度も英語科教員やＡＬＴの指導を受け完成させていった。発音指導、イントネーション指導等を頻繁に行なった結果、２名の生徒が本戦への出場を果たす事ができた。本戦は非常にレベルが高く、上位６名に入ることは出来なかったが、出場した生徒には、さらに英語力を磨くモチベーションになりとても良い刺激になった。

（イ）本戦の様子

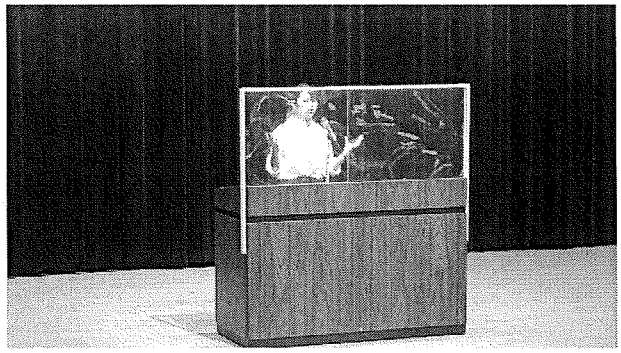
本戦は１０月１７日（土）に三重県人権センター多目的ホールにて無観客で開催され、引率者も出場者一名につき一名と限定されていた。また、発表者がスピーチをする演台には飛沫感染予防のためのビニールシートが取り付けられ、発表が終わる毎にマイクの消毒をしながら進められた。

本校から出場した２名（２年生 橋爪 彩音、２年生 山本 朝日）は、緊張しながらも、練習してきた成果を十分発揮し堂々と発表していた。

発表後には、他の出場者と楽しく談笑する姿も見られ、他校の生徒とも仲良くなるきっかけになったようである。



（橋爪彩音の発表の様子）



（山本朝日の発表の様子）

（ウ）スピーチのスクリプト

２年５組 橋爪 彩音

Using Pessimism to Grow

“How much are you satisfied with what you have done today?”

This is the question I was asked by one of my friends when I participated in an English camp for young kids in Nagano. I was one of the assistants who was organizing and leading all the activities at the English camp. After the camp, I regret that I relied too much on the other assistants and did not try hard enough to collaborate with others. To tell you the truth, I was not confident about using English or leading the activities. Maybe I looked sad at that time. One of my friends, Tomoki, talked to me and asked me this question. I answered him quietly, "How much am I satisfied? Less than 50 percent. I couldn't do anything to help you guys today and I felt like I was just dependent on you."

I consider myself a very pessimistic person. I have always been pessimistic, my whole life. If I look at a glass of water, I tend to think that it is half empty rather than half full. I don't like myself always being so pessimistic and not being confident in anything. And, I have always thought being pessimistic is a bad thing.

However, when I told Tomoki that my satisfaction with myself at the English camp was less than 50 percent, what he said to me afterwards astonished me. He said, "Oh, that's good. The fact that your satisfaction is less than 50 percent means that you still have room for improvement. If you are satisfied with your current self, you will not grow any further."

To hear those words was eye-opening for me. I had never thought that way before. According to data I collected from the Internet, a majority of Japanese people are pessimistic and tend to think negatively about themselves. I used to think I was one of those people, however, I have realized that being pessimistic is not always such a bad thing. Thanks to my friend, Tomoki, I have come to think that being pessimistic can be the first step toward changing myself for the better.

After this English camp experience, I began practicing my English more by focusing on the lessons at school and studying more at home. It took me a long time, but, gradually I came to realize that my English was improving. And, my test scores were getting higher too. When I found out that I had passed selection for a study-abroad program and had been accepted to go to Canada for a year, I was really happy. Unfortunately, due to the COVID-19 pandemic, I can't start my new journey this year. However, I'm hoping to go to Canada next year. My dream has always been to study abroad while I am a high school student. I am very excited that my dream will come true next year.

Surprisingly, all of this started with my pessimistic way of thinking. But, if you try to look at things from a slightly different perspective, you can turn your pessimistic thinking into motivation to be a better you. Remember, being pessimistic is not always such a bad thing.

Now let me ask you this question.

"How much are you satisfied with what you have done today?"

Thank you very much.

２年５組 山本 朝日

What does it mean to be internationally active?

What do you imagine when you hear the words, "be internationally active"? I am a high school student in the international course at my school. Our teachers often tell us, "We want you to be internationally active in your future!" Every time I hear these words, one question comes to my mind, "What do they mean by 'be internationally active'?" Of course, I immediately think you have to be able to speak English fluently. Certainly, English is very important, but is fluency in English enough to be internationally active?

When I entered high school, I made many friends. However, there was one person in my class who did not talk to anyone. At that time, she was always reading books by herself in our classroom. One day, in a group activity in my science class, I was in the same group as her. At first, I wondered if I should talk to her because she had been quiet and isolated from everyone. But I thought, I wanted to get to know her. So, I decided to talk to her, and then, she talked a lot! I was so surprised! After that she said, "Thank you for talking with me! I really wanted to talk to everyone, but I was very nervous and I couldn't do it. You have helped me a lot!" From that day on, she started to talk to me and everyone else more and more.

I have realized something important from this experience. That is, rather than judging someone by how they look, it is important to try getting to know them. Thinking back to my teachers' words about wanting us to be internationally active, I have also realized that talking to my classmate was similar to talking to foreigners. When you talk with people from other countries, of course, it would not be easy to understand others, because of their cultural background, language, or religion. However, if you have an attitude of opening up yourself and acting voluntarily, you can make friends with foreigners in the same way you do with your classmates.

Then, how can we become internationally active? I think there are many things we can do to develop this kind of attitude, one of which is to be interested in various cultures and their people. By doing so, we can broaden our knowledge and thoughts about the world and the people living there. If you have something you are interested in, you should not hesitate to start something new. For me, after entering the international course, I started things I had not done before. For example, I didn't read many books before, but now I do. Also, I belong to the English Speaking Society club and actively participate in the local community as a volunteer interpreter. For example, by participating as a volunteer interpreter, I have learned a lot about other countries such as Russia, Canada, and Australia. Through this kind of activity, I have gained a more hands-on experience than what I learn at school, and I would like to do more of this before I graduate from high school.

Therefore, in my opinion, it is necessary to be open-minded and to challenge yourself in order to be internationally active in the future. So this is my answer to

the question, “What do they mean by ‘be internationally active’?”, and now I’d like to ask, “What is yours?”

（エ）成果と課題

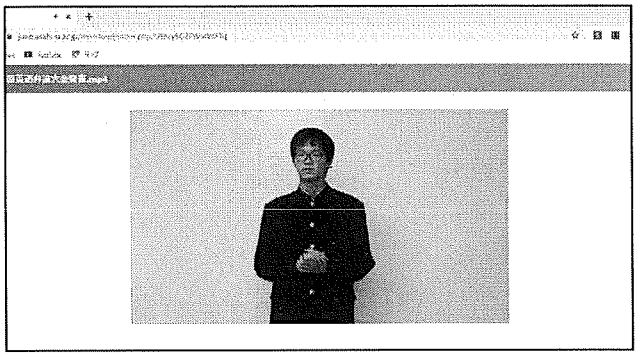
スピーチコンテストに積極的に取り組むことで、まとまった英語の文章を論理的に書く能力や、ジェスチャーやアイコンタクトを含めた表現力の向上に繋げることが出来た。しかしながら、上位に入賞することが出来なかったことから、その原因を考えると、英語の表現力という部分ではなく、内容に問題があった。最近の英語スピーチコンテストでは、社会的な事象を扱いつつ、その中に個人のエピソードや体験を入れ、その課題を解決するために実際に聞き手を行動に導くようなスピーチが求められている。この反省を生かし、次年度にはスピーチコンテストにおいて上位入賞が果たせるよう取り組んでいきたい。

イ　朝日大学主催 第３６回高等学校英語弁論大会

（ア）取組

昨年度から本校ＥＳＳ部の生徒が参加しはじめた英語弁論大会であるが、昨年に引き続き今年も１名の生徒が書類審査を通過し、本戦に出場することが出来た。

今年は全国３６の高校から６５名もの応募があり、書類審査を通過した１７名が本戦に出場した。例年であれば、朝日大学にて本戦が行なわれるのであるが、今年度は新型コロナウィルス感染拡大に伴い、出場者は全員動画を大学に送付し、オンラインでの大会となった。



（竹田裕喜のオンラインでの発表の様子）

本校から出場した生徒（２年生 竹田 裕喜）は、何度もスピーチの練習を英語科教員やＡＬＴと行い、動画を録音した。

（イ）弁論大会の様子

１１月２８日（土）にオンラインで開催され、発表順に発表者のスピーチ動画が流された。北は東北地方、南は沖縄の高校からの参加者が集い、とてもレベルの高いスピーチコンテストであった。本校の生徒は１７人中１６番目の出場であったが、堂々とスピーチをしている姿が見られた。

（ウ）スピーチの内容

２年５組 竹田 裕喜

What it means to be an “adult”

Have you ever worked a part-time job? In my case, I have had two. It was only for money because there were many things that I wanted to buy at that time. Then, by working part time, I came to understand the value of money and realized how hard working actually was. Since then, I have tried not to waste my money on things as I did before. However, what I have learned from working part time was more than that.

“We were disappointed with your service.” A group of customers said to me. It was the first complaint I ever had, and I was shocked, but I tried to learn from my behavior. I thought the reason for this complaint was because I always showed my negative emotions through my facial expressions and quiet personality. That’s why the first impression I gave to people was probably a bad one. However, through this experience, I have learned that when we work, we are not allowed to show our negative

emotions to customers, as it makes them uncomfortable. I have realized it is necessary to take responsibility for our own behavior when we work.

By paying attention to such an important but very basic thing, my attitude has changed, even when I communicate with my friends at school. I was not good at communicating with people around me, but I felt that it was easier to talk with someone I hadn't talked too much before. For example, when I had a task with one of my classmates I wasn't so close to, we could cooperate effectively and finish it quickly, and we even had the best presentation in our class. I think that's due to the fact that my communication skills had improved. Through my experience, I learned two important things; one is taking responsibility, and the other is communicating in a better way. I think that these two things are very important in our society.

High school is the period when we grow to become adults. Recently, Japan has lowered the voting age, and adulthood will be changed from 20 to 18 in a few years. As you can see from these facts, high school students are required to play an important role in our society. We have to be responsible adults even though we are still young. I think adulthood means that a person is in the stage where they can take responsibility for what they do. I hope that I can do this. If we don't have good social skills, we can't be a member of society in a positive way. For example, if we are not responsible for our own actions at work and cannot be respectful of others, that will reflect how we behave in the outside world. Unless we collaborate well with each other, it will be difficult for us to be respectable people. I think having a part-time job can be the first step towards developing skills that are useful in society. That's why I think we should have a chance to have a part-time job while we are high school students.

I guess everyone has a different image about their future and what it means to be an ideal member of society. For me, based on my experience from part-time jobs, I want to be a person who has a strong sense of responsibility and good communication skills in my future. To me, this is the meaning of the word, "adult."

（エ） 成果と課題

この大会は出場者が全国から集まる大会だけあり、非常にレベルの高い大会であった。その中で上位に入賞するためには、やはり最近の英語スピーチコンテストの主流である、社会的な事象を扱いつつ、その中に個人のエピソードや体験を入れ、その課題を解決するために実際に聞き手を行動に導くようなスピーチに仕上げていく必要がある。この反省を生かし、次年度もこのスピーチコンテストに積極的に挑戦して行きたい。

第４節　伊勢志摩ＰＲプログラム

１　課題研究「観光とビジネス」について

（１）　はじめに

「観光とビジネス」講座は今年度から開講され、ＳＤＧｓの理念に基づいた、自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取組を学ぶ。また、インバウンド観光に需要が高まっている現在に対応できる力を身につけることや従来型の観光でない地域の生活文化を体験するなど、地域住民と訪問者の交流が観光の多様化を産むこと、地域と訪問者を結ぶ存在として、必要とされる力を学ぶことを目的としている。

（２）　内容

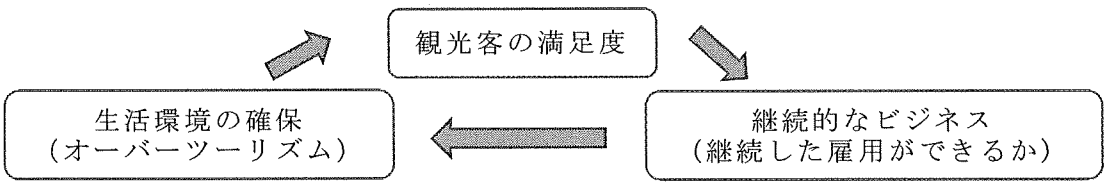
ア　調べ学習

新型コロナウイルス感染症対策による休業期間もあった１学期は、「ＳＤＧｓ」、「エコツーリズム」や「グリーンツーリズム」について各自調べ学習を行い、休業明けに班ごとで発表会を行なった。地元のＳＤＧｓの取り組みを知ることと、住んでいながらもあまりその取組について地元に知られていない課題も見えてきた。またコロナ渦においてもできる観光はないか、観光は非日常を感じることであることを理解させ、発想力を養った。

イ　観光について

観光にかかわるさまざまな産業（宿泊、商業施設、公共交通機関、農業、漁業など）、特にインバウンド産業（訪日外国人の旅行消費額は４．４兆円）について学び、外国人は観光地巡りだけでなく、布団で寝る、箸を使う、田植え体験等も新鮮な魅力であることを知った。またコロナの影響でインバウンドが減少するなか、マイクロツーリズム（近場の旅行）が人気であることをしり、地元の魅力を再発見することとした。

また、持続可能な観光について「顧客満足度」と「継続的な利益が見込めるビジネス」と「観光地の生活環境の確保」について考えた。



参考）「観光教育ノススメ」動画

ウ　答志島（鳥羽市）にてグリーンツーリズム体験

株式会社三重スポーツコミュニケーションズ代表取締役社長　中村和久様に講師を依頼し、答志島のこと、グリーンツーリズムのことについてご自身の経験も踏まえながらお話をいただいた。そこから学びたい体験を４つの中から選んだ。

釣り体験

→地元の方が教えてくださり釣りが初めての生徒もたくさん釣ることができた。

島路地裏散策

→島の旅社の方に案内をしてもらい、地元の方々とふれあいながら答志島を知ることができた。

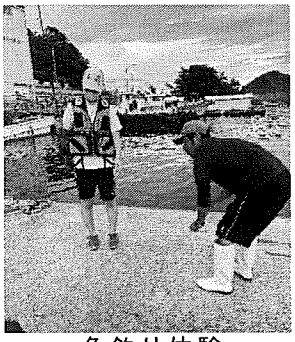
シーグラスアクセサリー作り体験

→海岸に流れてきたガラス片を拾いに行き、アクセサリー作りを体験。海岸ゴミの状況を知ることができた。

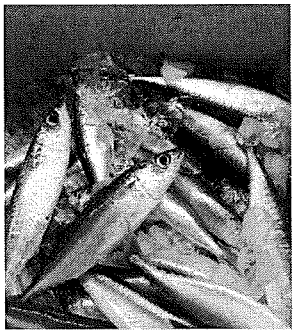
干物づくり体験

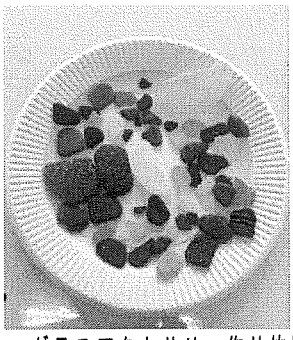
→魚をさばくことを教えていただいた。時間がなく干すところまで体験はできなかったが、魚をさばくことの楽しさを実感。

すべてのコースにおいて島の方とふれあうことで、「人が観光になる」ことを実感することができたのではないか。

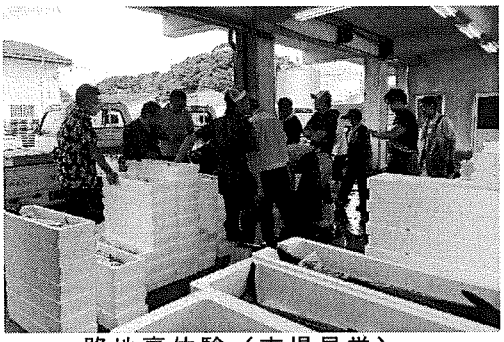


魚釣り体験





シーグラスアクセサリー作り体験

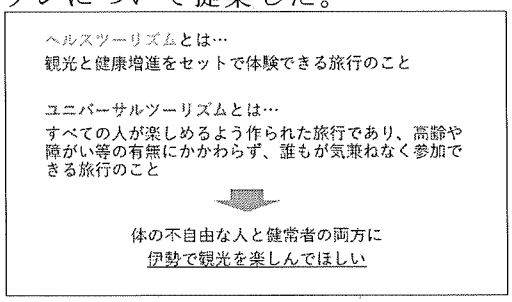


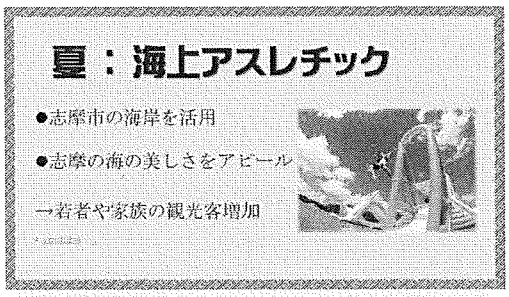
路地裏体験（市場見学）

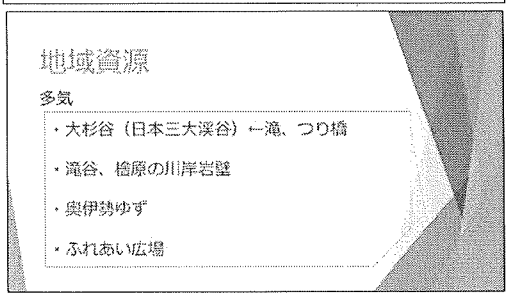
干物づくり体験
（魚のさばき方講座）

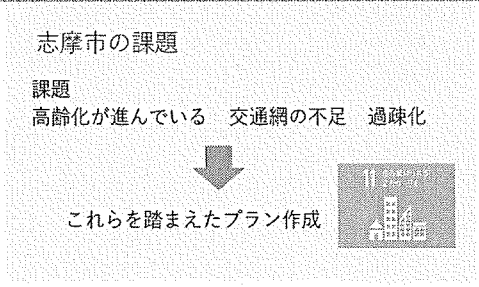
エ　株式会社ＪＴＢコンペ

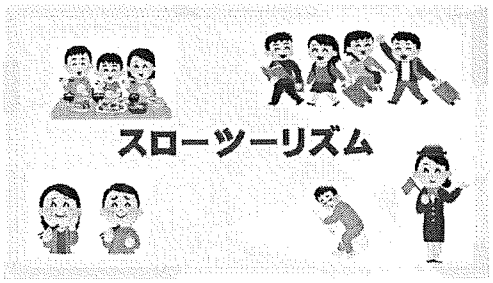
・伊勢志摩地域の「自然」、「食」、「文化」、「歴史」を班ごとに調べた。
・それぞれ興味のある地域について各自治体の「まち・ひと・しごと総合戦略」を調べ「地域調べ」を行った。コンペはパワーポイントを用いて旅行コンテンツやプランについて提案した。

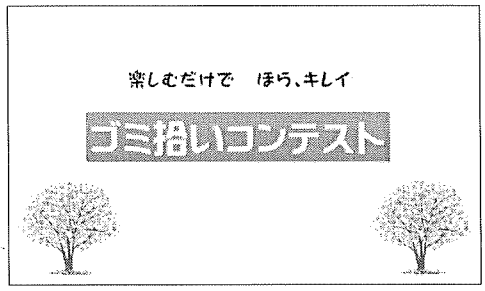












（３）　学習の成果

ＪＴＢの観光開発プロデューサーへのプレゼンは成功し、提案したプランは面白いものもあり、目のつけどころは良い、とコメントをいただいた。また答志島の観光動画を作成した班については、株式会社三重スポーツコミュニケーションズ代表取締役社長　中村和久様から是非答志島の観光ＨＰに掲示したいと言っていただいた。各自治体の課題から検討し、プレゼンにもっていったことは良く、ＳＤＧｓを絡めた観光を学ぶ事ができたと考える。

（４）　まとめと課題

発想や目のつけどころは良かったものの、実現可能かどうかの点についてすぐ取り扱うまでは至らない旅行コンテンツが多かった。行政の観光課等に質問をし、課題やハードルの高さを確認する必要があった。またビジネスとして成り立つかどうか、の点において発想が良くても利益の予測がつかないものは取り入れてもらえないので、利益をどれくらい見込めるのかについても深く研究する必要があることを痛感した。

２　情報処理科２年生　商業科選択科目「ビジネス情報管理」

（１）　はじめに

この授業においては、システム開発を行う知識を修得することが目的となっており、以前は仮想的にシステム構築を行うなどの実習を行っていた。本校においては、学校設定科目「情報概論」において、経産省情報処理国家試験合格レベルの授業を行っており、システム開発に関する様々なケースが出題されていることから、開発に関する知識は十分に習得しているものと考える。しかし、良いシステム開発を行うためには、情報の表現や伝達手段などの理解が必要であるとともに、情報の活用する力を育成する必要だと考えた。

そこで、ＳＮＳ等で活用されている動画に注目し、データの収集力・取捨選択力、表現力、データの加工技術等を育成することとした。

また、動画配信をＳＤＧｓと観光というテーマに考えていたところ、観光甲子園というコンテストがあることを知り、「日本遺産部門」と「訪日観光部門」の２部門へエントリーすることとなった。

（２）　対象

情報処理科２年生の選択科目「ビジネス情報管理」(週３単位)、選択生徒は７名。

（３）　取組内容

ア　１学期

令和２年３月２日から新型コロナ感染拡大防止のため休業処置がとられ、実際の授業がスタートできたのは、６月に入ってからである。休業期間中にもオンラインでの授業を行っていたが、地域の観光に関する現状や観光客が求めるものなど、取材に関してもオンラインで実施するなど、できる範囲での授業となった。取材先は、公益社団法人伊勢志摩観光コンベンション機構のインバウンド担当岩嶋恭平氏と、㈱伊勢

志摩ツーリズム代表取締役社長西田宏治氏である。取材を通してこの伊勢志摩には沢山の観光資源が存在しているものの、ほとんどの観光客はステレオタイプ的に、伊勢神宮、おかげ横丁といった代表的な観光地を訪れており、地域としても豊かな観光資源を生かし切れていないと教えられた。また、海外からの観光客は、その地を訪れなければ体験できないような体験型の観光を求めていることも分かった。

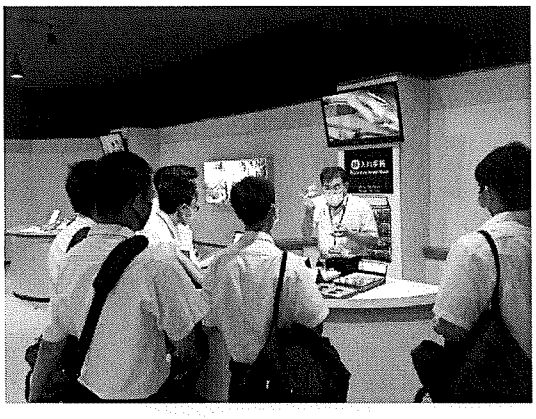
取材を通して、観光甲子園へのエントリーするテーマを「海女文化」とし、「日本遺産部門」と「訪日観光部門」のそれぞれの部門で、ターゲットを絞り、「海女文化」の何をどのように映像を通して伝えるのかを討議して検討し、絵コンテとして書き表し、その後台本としてナレーションなども考えた。

動画を作成するにあたり、地元でビデオ制作の会社を経営されておられる伊勢志摩ビデオサービス㈱取締役社長の堀江しおん氏を授業にお招きして、生徒たちが考えた絵コンテや台本見ていただき、ご指摘をいただいた。また、取材先及び撮影場所のご意見をいただき、堀江氏の人脈によりアポイントを取っていただくこともできた。

イ　2学期

取材及び撮影場所として、御木本真珠島と鳥羽市立海の博物館をまず訪問することとなった。目的は「海女文化」に関して沢山の資料からＳＤＧｓとの関わりや地域の歴史文化、地域の産業との関わりなど、テーマである「海女文化」の理解である。

御木本真珠島では、取締役の柴原氏より、地域産業である真珠養殖発明に「海女」がどれだけの貢献を行ったか、養殖技術におけるＳＤＧｓへの取組などを説明いただいた。また、海の博物館では学芸員の方から「海女文化」の歴史や地域ごとに異なるものの、乱獲を防ぐためのルールなど、過去から現在に至る中で、海女が果たしてきた伊勢志摩の豊かで美しい海を守る取組を紹介いただいた。

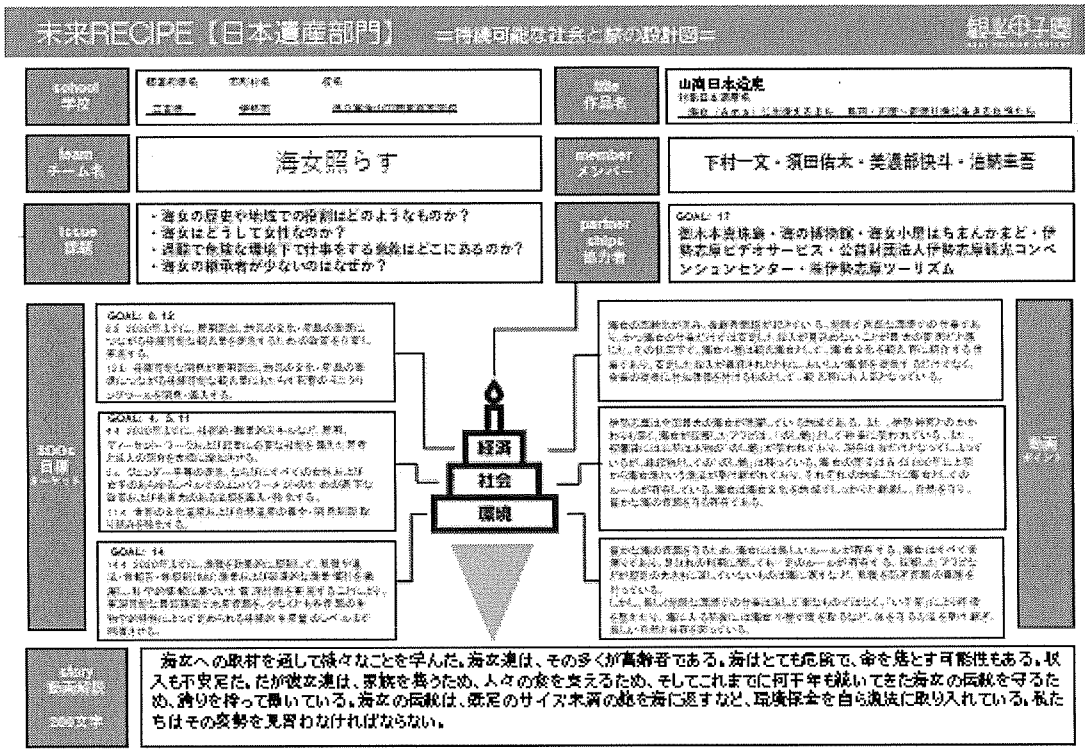


観光資源としてテレビをはじめとしたマスメディアにも紹介される「海女小屋」を訪問した。実際に囲炉裏で焼いた干物や貝をいただき、「海女小屋」が海女にとってどのような場所で、大事な場所であることを教えていただいた。相差音頭に合わせて踊りも一緒に踊るなど、追体験を行いながら「海女文化」の理解を深めることができた。さらに実際の海女さんに取材に応じていただき、生徒たちが感じた疑問を質問し、答えていただけることで、昔から海女たちが自分たちの命や豊かな海を守るために続けてきた「海女文化」への理解がさらに深めることができた。

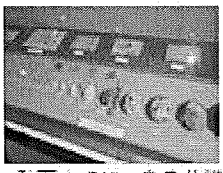
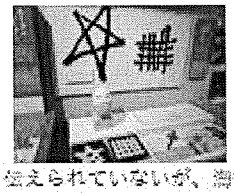
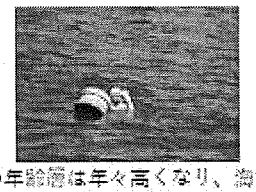
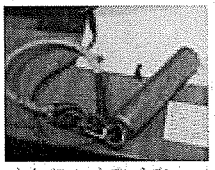
取材を通して学んだこと感じたことを3分間の動画に仕上げていくが、限られた時間の中で、映像をもとにメッセージを視聴者に伝えることは容易ではない。ビデオ制作のプロである堀江氏のアドバイスをもらいながら、編集作業、ＢＧＭの選定、ナレーションの録音など、初めて経験することばかりで、その難しさを感じながらも、生き生きとしながら仕事を分担し、協力しながら完成することができた。

（４）　観光甲子園

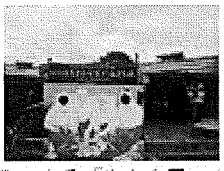
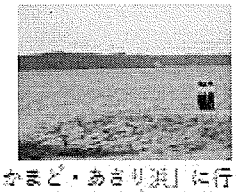
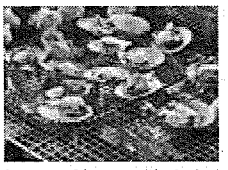
ア　日本遺産部門で提出したエントリーシート



● 自由記入欄（任意）

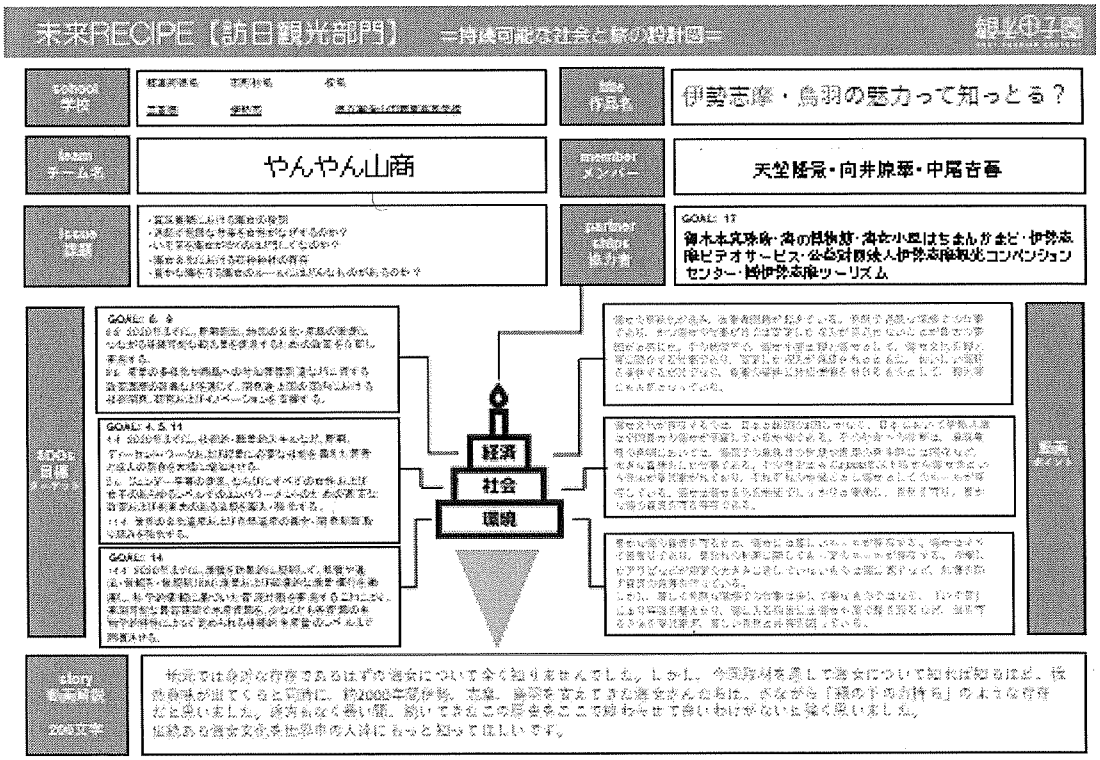





動画内では、あまり詳しく伝えられていないが、海女の年齢層は年々高くなり、海女の数も年々少なくなっている。つまり、約２０００年前から続く海女の伝統的な文化が消え入りつつあるということだ。この文化をなくさないようにするためにできることは積極的なPRだと思う。多くの方に海女の存在を知ってもらい、志摩や鳥羽に来てもらい海女の文化に触れてもらうことで、海女の文化は続いていくのだ。この動画は、そのようなことをふまえて作成した。この動画が多くの方に見られることを願っている。

私たちは三重県鳥羽市相差町にある「海女小屋はちまんかまど・あさり浜」に行きました。そこで、海女さんが採取してきた貝、そして魚を食べました。貝はサザエとヒオウギガイ（バタ貝）、魚は干物でした。食事中、海女さんが踊りを踊ってくれて、楽しく食べることができました。食事後、海女さんへのインタビューで「海女漁がどのように行われているのか」や「海女をやっていて嬉しかったこと」なども聞きました。インターネットでは調べられなかったことを、実際に海女さんから聞くことができました。私は現地の人に直接会いに行き、話を聞くことは大切だと思いました。

イ　訪日観光部門で提出したエントリーシート



未来RECIPE【訪日観光部門】　＝持続可能な社会と旅の設計図＝　銀光中学園

school 学校

team チーム名：やんやん山商

theme 内容：
・貿易業務における職業体験
・海外で活躍する先輩を身近なものとする方法は？
・いろいろな職業を知ってみるにはどうしたらいいか？
・海外を知るにあたっての初歩的な内容
・貿やる海外を対象者のルールにはどのようなものがあるのか？

title 作品名：伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？

member メンバー：天堂怪景・向井原華・中尾吉春

partner chapter 協力者：GOAL: 17
御木本真珠島・海の科学館・海女小屋はちまんがまど・伊勢志摩ビデオサービス・公益財団法人伊勢志摩観光コンベンションセンター・国伊勢志摩ツーリズム

SDGs 目標ターゲット：
GOAL: 6, 8
8.9 2030年までに、雇用創出、地方の文化・産品の販売に対する持続可能な観光業を推進するための政策を作成する。また、地方の文化の保護を図る。
GOAL: 4, 5, 11
4.4 2030年までに、技術・職業スキルを含む、適切な、すべての若者と成人の数を大幅に増加させる。
5.b ICTを含む、特に女性の使用を強化するための可能な技術の強化を図る。
11.4 世界の文化遺産および自然遺産の護持・保全の取組を強化する。
GOAL: 14
14.4 2020年までに、漁獲を効果的に規制し、過剰な漁獲・違法・報告されない漁業および破壊的な漁業慣行を終息させ、科学的な管理に基づいた管理計画を実施することにより、実行可能な最も短い時間で、少なくとも資源量を持続性のある水準に戻すことを可能とするために、魚類資源を回復させる。

経済
社会
環境

story 動画内容 2分以内：
伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？
伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？
伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？
伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？
伊勢志摩・鳥羽の魅力って知っとる？

銀光中学園　予選動画作品応募シート

● 自由記入欄（任意）

最初は、海女文化について全然知らないままに「キキモト・真珠志摩」へ足を運びました。そこで、海女の実演を見て、初めて海女に興味を持ちました。
そして、海女について知っていくうちに歴史にも注目するようになりました。

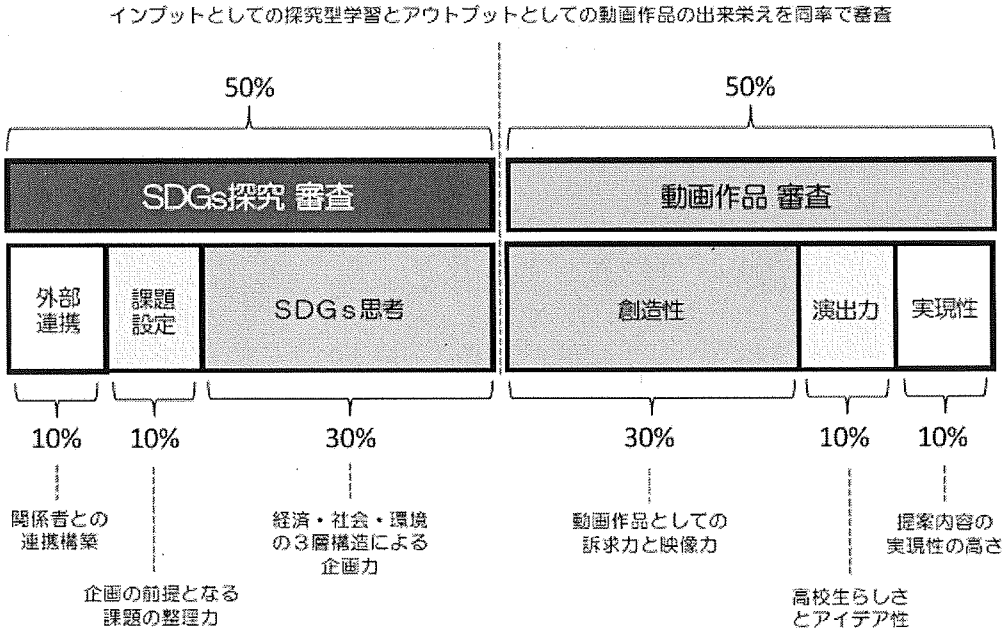
海女とは、約3000年前から、伊勢、志摩、鳥羽を支えている「縁の下の力持ち」のような存在であり、今、SDGsで再注目されている職業です。

しかし、海女は近年あまり話題に上がってこないため、少しでも大勢の方に海女の魅力について知ってもらい、

海女文化から、和山のことを学んで欲しいです。

ウ　観光甲子園審査基準

＜審査基準＞



（５）　まとめ

残念ながら、観光甲子園の予選を通過することはできなかった。しかし、沢山の方々のご協力を得て、生徒たちが苦労して作成した動画である。予選は通過できなかったが、動画としての出来栄えは上出来であり、地域の観光に少しでもお役に立てばと考え、公益社団法人伊勢志摩観光コンベンション機構へ提供したいと考えている。

また、生徒たちはこの取組を通して沢山のことを学んだ。ＳＤＧｓは現在脚光を浴びているが、地元である伊勢志摩には昔から持続可能社会に貢献した取り組みが存在したこと、地域経済に貢献してきたこと、女性がいきいきと働く文化があったことなどを知り、誇らしく感じるとともに、この文化を守っていかなければいけないと感じているようである。

第５節　国際交流プログラム

１　モンバルク校とのWeb授業交流

（１）　経緯

本校は、平成６年３月にオーストラリアの高等学校モンバルク・カレッジと姉妹校提携を結び、現在に至るまで提携事業を続けている。この事業では、生徒及び教員の相互の派遣を行い、ホームステイ・授業・特別活動等を通じて交流をし、相互の国の文化や社会について理解を深めるとともに、生徒の英語による理解力・表現力を向上させ、国際化時代に対応できる高等学校教育の充実を図ることを目的としている。

例年９月にはモンバルク・カレッジの学生と教員が本校を訪問し、３月には本校の学生及び教員が姉妹校を訪問している。しかしながら、２０２０年３月に予定されていたオーストラリアへの訪問は、新型コロナウィルスの影響によりキャンセルとなった。その後、同年９月に予定されていたモンバルク・カレッジ生の来訪、２０２１年３月の本校生のオーストラリア訪問も中止が決定し、実際に行き来する形での交流ができなくなった。

そこで、休校中のオンライン授業等で学んだノウハウを活用し、両校がオンラインでＷｅｂ交流をすることで、画面を通してではあるが、お互いの様子を見たり話したりできると考えた。モンバルク・カレッジで日本語を担当している教員とメールで連絡をとりあい、２０２０年１２月１１日（金）午後に、本校のＥＳＳ部の部員と、現地で日本語の授業を履修しているオーストラリア人の生徒との交流会を実施することとした。

（２）　Web交流

ア　日時・場所等

日時　２０２０年１２月１１日（金）１２：１５～１３：００
（オーストラリア時間では同日の１４：１５～１５：００に当たる）

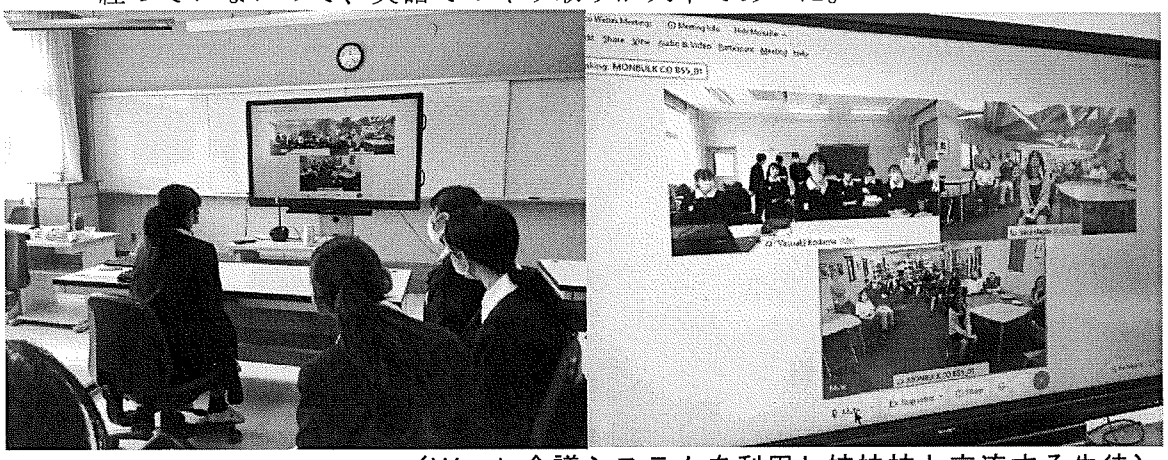
場所　本校第２プログラミング室

会議システム　Cisco Webex

イ　交流内容と様子

今回の交流は、本校のＥＳＳ部に所属している１年生から３年生までの合計１１名と、姉妹校モンバルク・カレッジにて日本語の授業を履修している現地生徒の交流であった。

最初に両校の生徒が自己紹介を（本校生徒は英語で、姉妹校の生徒は日本語で）行い、続いて本校生徒が予め考えておいた質問を英語で尋ね、姉妹校生徒の英語での回答を頑張って聞き取っていた。現地の生徒はまだ日本語を学習して日数が経っていないので、英語でのやり取りが大半であった。



（Ｗｅｂ会議システムを利用し姉妹校と交流する生徒）

（３）　生徒アンケートより

・オンラインではあったが、モンバルクの生徒の様子が分かったし、慣れない会話の仕方ではあったが、コミュニケーションは取れたので楽しかった。今回は互いに質問をしあうというとても簡単なものだったけど、相手のことは少しは分かった。どれだけ離れていても、機器があれば顔が見られてコミュニケーションが取れるのは

メリットであると思うが、画面越しだと相手の心情まではわからない。
・コロナウィルスの影響で、海外の人と関わる機会が極端に減っていたので、とても良い時間だった。同時に、実際にオーストラリアを訪問し、顔を合わせてしゃべりたいという気持ちが強くなった。最近オンラインで仕事をする人が増えてきているので、その疑似体験ができて楽しかったし、良い経験になった。Web 交流のメリットは、どんな状況、どんな時間でも双方の都合が合えば遠くに居る人たちとも会話ができることであるが、デメリットは、同時に話すと互いの声が上手く聞こえなくて、少し気まずい時間が流れることがある。
・直接会うことができないのは残念だと思ったけど、オンラインで画面を通して交流することができて嬉しく思いました。次回はお互いの文化紹介のプレゼン等をやってみたいです。
・少しでも外国の文化に触れることができ、今まで漠然としていた外国での過ごし方や現地における日本の印象を知ることができた。今まで ALT 以外の外国人と一度も話したことがなかったので、コミュニケーションの楽しさを改めて感じることができた。Web 交流のメリットは、外国に行かなくても現地の人とコミュニケーションがとれるという点にあるが、直に伝わるもの（ジェスチャーや表情）がよく分からないという部分はデメリットであると思った。
・今年度はコロナの影響で交換留学が行なわれなかったため、少し寂しいと思っていましたが、このような形で交流できたのでとても楽しかったです。色々な都合で、コロナがなくてもモンバルクには行けないという人も、オンラインであれば生徒とコミュニケーションをとることができるので、そこは良い点だと思いました。緊張して全然自分の思ったとおりに話すことができなかったので、次このような機会があったときは、ハキハキ話せるように頑張りたいと思います。

（４）　成果と課題

新型コロナウィルスの影響で、相互の学校間訪問ができない現状の中、このようにオンラインで交流できたことは、本校と姉妹校の提携事業の継続という点では非常に大きかった。参加した生徒達にも好評で、次年度以降、より中身を充実させて Web 交流を図っていきたい。

2　皇學館大学留学生との交流会

文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」の指定を受け、持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダーを育成することを目指し、語学力の育成にさらに力を入れていく必要があることから、学校設定科目「グローバル・コミュニケーションＡ・Ｂ」を開設した。この科目の目標は、「これまでの書くことと話すことを主眼に置いた授業内容をさらに深化させ、ＳＤＧｓについて学び、その観点から英語でまとまった文章を書いたりディスカッションしたりする能力を身に着ける」ことにある。

この科目の取組の一環として、３年生の国際科に在籍する生徒を対象に、皇學館大学で学ぶ留学生との英語による交流会を２０２１年１月２０日に企画していた。しかしながら、全国的な新型コロナウィルス感染拡大の影響をうけ、関東圏を中心に緊急事態宣言が再発令され、本県においても１月１４日から２月７日の期間に緊急警戒宣言が県独自で発令された影響により、校外から人を招聘するようなイベントの自粛が求められ、中止することとした。

今後新型コロナウィルスの状況が落ち着いたときには、生徒が授業で学んだ英語を本当のコミュニケーション手段として使用する機会を創出するためにも、是非このような留学生との交流会を企画したい。

3　台湾の高校生との交流会

今年度、新たに国立羅東商業高校（台湾宜欄県）の生徒を受け入れ、ＳＤＧｓや互いの国の職業観等についてディスカッションを実施する予定だったが、新型コロナウィルス感染症拡大の影響を受け来日できず、交流会は中止となった。

4　みえグローカル学生大使 “Yamasho ESS Club”の活動について

（１）　『みえグローカル学生大使』について

ア　概要

三重県内において、国際交流や国際貢献といった国際的な活動を継続的に行う高校生及び大学生等を、「みえグローカル学生大使」として知事が委嘱する。本校 ESS 部は“Yamasho ESS Club”として令和元年９月６日に委嘱され、今年度は２年目となる。

イ　大使の業務

大使は自らの意思に基づき国際的な活動を行うほか、県と連携して次の業務に協力する。

（ア）県が行うイベント、国際的な活動等への参加

（イ）三重県の紹介や PR

（２）　今年度の取組内容について

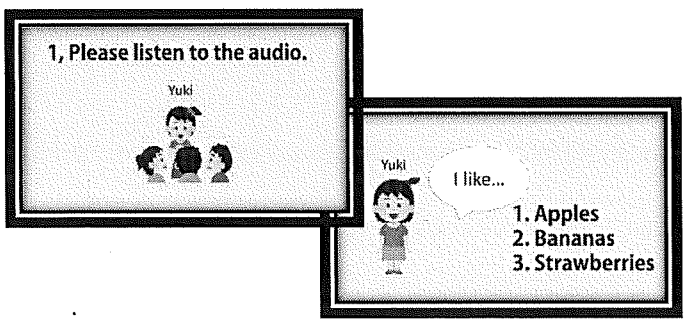
ア　SNS(Instagram)を利用した三重県の紹介

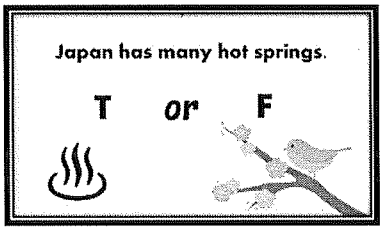
昨年度に引き続き、三重の食べ物や観光スポット、イベント等について、月に３～４回情報を英語で掲載している。外国人観光客や日本に在住する外国人に向けて、情報発信し、より多くの人に三重県の魅力を知ってもらうことを目標としている。海外のフォロワーからコメントをいただくなど、三重県の PR をより活発に行うことができた。

例）

イ　小学校での外国語活動ボランティア

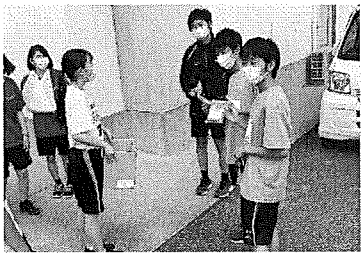
例年は市内小学校の外国語活動の授業にて、英語を教えるボランティアを行っている。今年度はコロナ禍であるため訪問できず、パワーポイントで小学生が楽しめる英語クイズを作製した。今後、異文化理解に関するクイズ等を加え、近隣の小学校へ届けることを予定している。





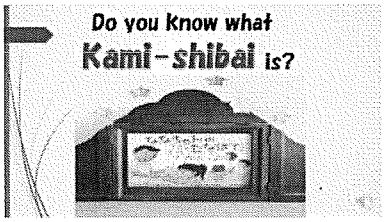
ウ　海外向けのFund-Raising(募金活動)

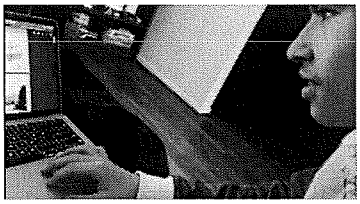
文化祭に合わせて、Bake Sale（学校などの団体が資金集めのためにお菓子等を販売するバザー）を行い、利益分(5,007円)を全額ユニセフへ募金した。昨年度よりこの活動の趣旨を理解してもらい、予想をはるかに超えた多くの生徒たちに参加してもらうことができた。

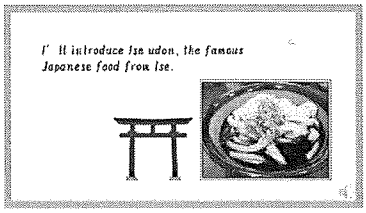


エ　海外への日本文化紹介

日本文化を紹介するプレゼンテーションを作製し、アメリカ（ワシントンDC）にある日本文化継承センターの生徒に向けて送った。そこでは日本に興味関心を持つ小学生から高校生までの生徒たちが週末に勉強しており、その高校生達に学習教材として使用してもらうこととなっている。内容は神社、伊勢うどん、紙芝居、日本の高校生活などであり、音声や動画も入れながら説明をした。いち早く見たアメリカの生徒からは「文化との違いを丁寧に詳しく説明してくれて楽しく学ぶことができた」などと感想をもらっている。







オ　「第９回太平洋・島サミット」に関連したオンライン交流イベント

（ア）　SHIMA SUMMIT zoom talk

Zoom を使い、島サミットに参加する太平洋の島国について英語で学ぶイベント（三重県青年国際交流機構主催）に参加した。第１回(2020年12月)はパプアニューギニアについて、第２回（2021年１月）はツバルについて紹介をいただいた。スピーカーはいずれも各島国出身で三重在住の留学生であり、お話いただいた後の質疑応答を通して、さらに各島国の文化や生活について理解を深めた。

（イ）　島サミットオンライン交流会

島サミットや開催地である三重県のPRについて、また太平洋諸国が抱える問題について英語で意見交換を行った。以前インターン生として三重県を訪問していたハーバード大学の学生とみえグローカル学生大使９名が参加した。活発に話し合いが行われ、今後のPR活動への意欲を高めた。

（３）　来年度の活動について

ア　今年度の活動を引き続き行うことに加え、大使以外の生徒たちの交流行事への参加を促す（オンラインイベント等)。

イ　海外の高校生とのインターネットを通じた交流の機会を増やし、自文化・異文化理解をより深める（姉妹校モンバルクカレッジの生徒との交流、アメリカの日本語を学ぶ高校生との交流等)。

ウ　ベイクセールを含めた募金活動の機会を増やし、国際問題への関心を高め、国際貢献に努める。

エ　「第９回太平洋・島サミット」に関して、参加する島国やサミットで話し合われる内容について理解を深め、SNS等を通してPRを進めていく。

第６節　研修プログラム

今年度、ＳＤＧｓの先進的な取組を学ぶためにスウェーデンへの海外研修を、観光資源を活用したエコツアーやグリーンツーリズムを学ぶためにマレーシア研修を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大をうけ、今年度の海外研修を中止し、その代替として当初の海外研修の目的を達成できるような国内研修(A:宮城　B:秋田　C:鹿児島(沖永良部)　D:兵庫）各コースを計画した。しかしながら、県外における研修も困難な状況になったため、秋田県、宮城県および鹿児島県における研修を中止し、プログラム開発を進めるためにも、県内研修に変更実施した。

１　Ａコース

（１）　参加生徒
　２年５組国際科 竹田 裕喜
　２年５組国際科 大門 絵美
　２年５組国際科 中原 沙奈

（２）　研究テーマ
「ＳＤＧｓと日常生活の融合－先進地域の取組から－」

（３）　目的
・ＳＤＧｓを達成するために、日常から自分たちにできることは何かを学び、日々実践する
・先進地域の活動を参考にして、私たちに欠けているものを理解する
・地域の自然がどのように観光資源として使われているかグリーンツーリズムを通して学ぶ

（４）　研修内容
ア　いなべ市訪問
（ア）　実施日
　令和２年１１月２０日（金）～１１月２１日（土）
（イ）　内容
①　いなべ市役所訪問

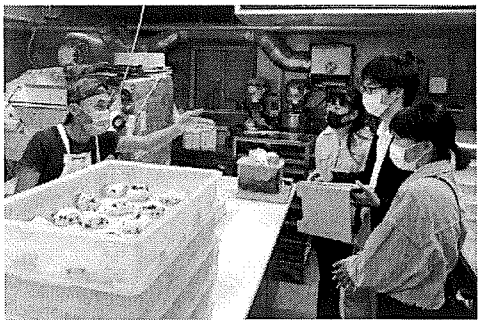
いなべ市は、２０２０年７月に内閣府より「ＳＤＧｓ未来都市」及び「自治体ＳＤＧｓモデル事業」に選定された。「ＳＤＧｓ未来都市」は、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）達成に向けた優れた取組を提案した都市が選定され、「自治体ＳＤＧｓモデル事業」は、地方公共団体におけるＳＤＧｓへの取組の中でも特に注力する事業であり、経済・社会・環境の３つの側面の総合的な取組モデルであることが求められる。いなべ市は、ＳＤＧｓへの取組のなかで様々なステークホルダーとの連携の可能性があり、都市・地域の自立的好循環が見込める事業として選定された。

このような先進的な取組を学ぶため、２０１９年５月に完成したばかりのいなべ市役所新庁舎（三重県いなべ市北勢町阿下喜）を訪問し、いなべ市のＳＤＧｓ推進の現状を企画部政策課の堀田彰宏さん、一般社団法人グリーンクリエイティブいなべの桑嶋幹人さんから伺った。

いなべ市のＳＤＧｓの取組は、２０１８年から本格的に開始した。堀田さん及び桑嶋さんからは、ＳＤＧｓの認知度を上げるための職員研修、官民連携ＳＤＧｓ懇談会等を重ね、グリーンインフラ商業施設「にぎわいの森」をオープンするに至った経緯や、その他の市の取組について詳しく聞くことが出来た。

②　グリーンインフラ商業施設
　「にぎわいの森」見学

にぎわいの森は、もともとあった地形を利用して季節風を取り入れ、雨水を貯留できる造りとなっており、その水はトイレの水等に利用し、地中熱も活用して二酸化炭素の排出削減に貢献している。



施設としては、名古屋や大阪からトップクラスのパン屋、ホットドッグ屋、タピオカ等のカフェ、デリ・フードブティックの店舗が官民連携のもとで集い、２０１９年５月のオープンからその年度末（２０２０年３月）までの入込客数は４４１，４８７人で、ビジネスとしても大成功を収めている。

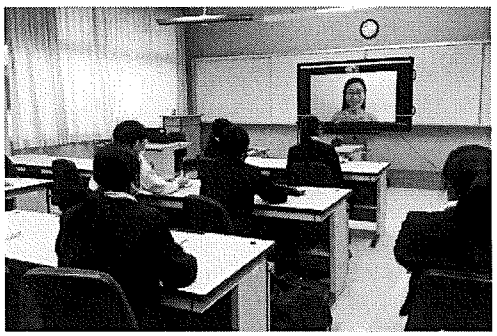
参加した生徒達は、にぎわいの森内の数ある店舗の中で、最も有名な「魔法のパン屋」のオーナーから話を聞くことが出来た。生徒達は、熱心に質問し、この商業施設内で店をオープンするに至った経緯やオーナーの自然に対する思い等を聞き取っていた。

イ　オンライン講義（スウェーデン）

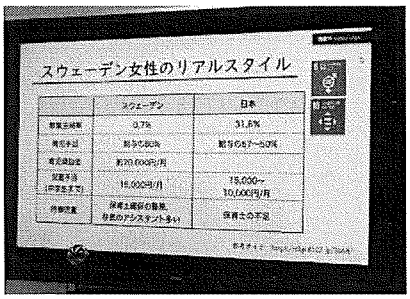
（ア）　実施日

令和２年１１月３０日（月）

（イ）　内容



今年度、ＳＤＧｓの先進的な取組を学ぶためにスウェーデンへの海外研修を計画していた。なぜスウェーデンなのかというと、スウェーデンはＳＤＧｓ国際ランキングで１位になっており、世界で最もＳＤＧｓや環境について先進的に取り組んでいる国の一つである。そのスウェーデンを訪問することで、ＳＤＧｓの理念がスウェーデン人の日々の生活にどのように浸透しているのか、企業はどのようにＳＤＧｓを考えながら経営を行なっているのか、国や市は政策としてどのような取組をしているのかを学ぶことが出来ると考えていた。しかしながら、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大を受け、残念ながらこの海外研修を中止することとなった。そこで、日本に居ながらにして可能なことを考え、スウェーデンに在住している方からスウェーデンの日々の生活について、ＳＤＧｓを中心に据え講義をしてもらうこととなった。



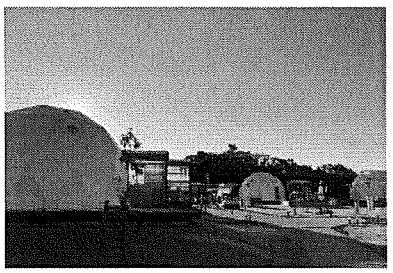
話をしていただいたのは、名古屋市出身のウンガー・紅巳子さんで、ウンガーさんは現在スウェーデン人の配偶者とお子さん２人でストックホルム近郊に住んでいる方である。ウンガーさんからは、日本とスウェーデンにおける違いをＳＤＧｓの観点別に話をしていただいた。話の中身は、環境への取組（ＳＤＧｓ目標７、１１、１２、１３、１４、１５）、学校教育（ＳＤＧｓ目標４）、男女平等と雇用（ＳＤＧｓ目標５、８、１６）に関わるもので、生徒達は日本だけで生活していてはわからないＳＤＧｓ先進国と日本における取組や生活の差について学ぶ機会となった。

ウ　グランピング体験

（ア）　実施日

令和３年１月８日（金）～１月９日（金）

（イ）　内容

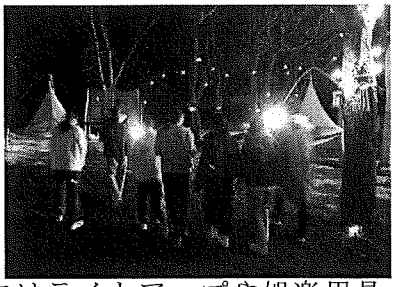


伊勢志摩地域の自然がどのように観光資源として使われているのかをグリーンツーリズムを通して学ぶために、この地域の自然（海）を生かした体験型宿泊施設『グランドーム伊勢賢島』を実際に利用することとした。

①　経営責任者からの講義

経営責任者の上原康介さんから、グランピングとは何なのか、なぜ賢島にこの

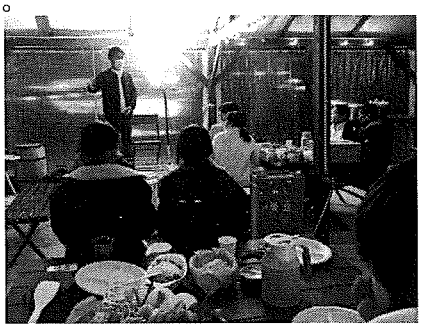
ような施設を作ろうと思ったのか、施設ができるまでの工事の過程等について詳しく話をしていただいた。生徒達も適宜ノートをとりながら、一生懸命に興味深く聞いていた。



② グランピング施設見学

グランピングとは「グラマラス」と「キャンピング」の合わさった造語であるが、その目的としては都会に住む人たちが自然豊かな場所に来て、ちょっと贅沢なキャンピング体験を通して非日常を味わってもらうことにある。そのために施設内にはライトアップや娯楽用具、冷暖房やベッドが完備されたテント型の宿泊棟がある。これら一つ一つを上原さんに説明をしてもらいながら、施設内を見学した。

③ グランピング体験



夕食はバーベキューであったが、食材は伊勢湾でとれたサザエやオウギ貝、松阪牛など地元の食材を積極的に提供している。これは、伊勢志摩の第一次産業の発展にも繋がる。地産地消という考えを積極的に取り入れ、また、アルバイトや従業員を多く地元から採用しているという点からも、この施設は地域人材の雇用にも貢献している。生徒達は、この体験をとおして、伊勢志摩地域には当たり前にある自然が、どのように観光資源として利用価値があり、観光客誘致に利用されているかを学ぶことができた。

（５） 参加生徒の声

・ＳＤＧｓでの地域活性化を維持させるためには、利益が生まれることも必要だと分かった。天然資源がたくさんあって、活かせる場所もあるけれど、海外に発信する力といった地域独特の課題もあると分かった。政府と市民、企業が協力して成立するというところを身をもって体感できた。

・日本での当たり前がスウェーデン（外国）では全く通用しないことや、ＳＤＧｓを達成するために日本に欠けているものが何かを教えてもらうことが出来た。ＳＤＧｓ達成に繋がる行動はスウェーデンの人たちに溶け込んでいると分かった。

・グリーンツーリズムが何なのかがよく分かった。その土地の魅力（特産物）は、その土地の人ではない人に注目して活用してもらう（グランピングを作るとか）ことで、新しい魅力を生み出したり、今までとは違う注目のされ方をすることが出来るのだとわかった。

・３年生での課題研究で、今回学んだ知識をもとにリードしていけるような存在になりたい。学んだ知識の中で自分たちに地域に取り組めることについて、実際に行動に起こしていきたい。ゴミの削減、差別のない発言、社会貢献活動への参加などの、自分たちに出来ることを日頃から意識して行なっていきたいと思います。

・ひとり一人が取り組みやすい環境を作るなど、みんながとり組みやすい環境作りが大切だと分かった。

・いなべ市の訪問から、地域活性化に取り組む中でどうＳＤＧｓを取り入れているのかを知ることが出来た。特に“にぎわいの森”では、地方の食材を利用したランチが提供されていた。

・グリーンツーリズムを体験し、アイデアと工夫により今までは特に何も思わなかった森や星でさえ立派な観光資源として利用し、環境を守りながらビジネスとして利用できることが分かった。

・研修を通して「何かを学んだ」というよりも「自分に自信がついて、自分から進んで行動できるようになった」という実感が持てた。次年度からは今回の研修で身についたものを生かして、控えめになるのではなく、率先して行動したり前に出ていけたらいいなと思う。

・まず何かを企画し、実行に移すまでの過程がとても大変だとより分かった。コロナウィルスの影響で、二回研修企画が白紙になり、自分たちでしたいことを提案して良いとなったとき、最初はワクワク感がとても大きかったが、考えをまとめたり、話し合いを重ねて行くにつれ、だんだんと大変さが大きくなっていった。しかし、他のメンバーや先生含む大人の人にサポートしてもらえたので、まだ負担も少なく、

良い経験が出来た。
・３つの研修を通して、自分のＳＤＧｓに対する考え方、捉え方がだんだんと変化していったのをとても感じた。最初はやはり堅苦しく真面目くさったイメージがあったが、研修で出会った大人の方々全員が優しくわかりやすく、そして気軽な空気の中で説明してくださったので、そのおかけでより柔軟な発想ができるようになり、研修の計画や報告会での発表などにとても役立った。
・研修での気付きを大切にし、日々の生活の中で少しずつでも自分の行動を変えていきたい。あえて意識しすぎないことで、自然と自分のＱＯＬも向上すると思う。
・自分たちはあと一年しかなく、受験勉強などもあり、なかなか他のことに時間を使えないと思うので、後輩に自分たちが学んだこと、経験を伝えて、どんどん活動を繋いでいって欲しいと思う。

（６）　成果と課題

コロナウィルス感染拡大の影響で、当初予定していたスウェーデンとマレーシアへの海外研修が中止となり、その代替として考えた国内研修（A:宮城　B:秋田　C:鹿児島（沖永良部）　D:兵庫）までもが県外移動の自粛が求められ、実施できなくなった。そこで、県内で出来ることを考え実施することとした。計画段階で生徒達に主導権を与え研修内容を考えさせたが、彼らのみずみずしい感性と柔軟な考え方で、教員が考えつかないような意見やアイデアを出してくれ、結果的には大変学びの多い研修を行なうことが出来た。

次年度もコロナウィルスの状況によっては海外や県外での研修が制限されることも予想されるが、今年度のように可能な範囲で最大限の効果を生むような研修を生徒ともに計画していきたい。

２　Ｂコース

（１）　参加生徒

２年１組商業科　森田　万智
２年２組商業科　村田　きらり
２年２組商業科　玉木　もも
２年３組商業科　谷　今日佳

（２）　研究テーマ

「過疎化地域における地域創生に向けた取組の学習と地域資源を生かしたグリーンツーリズムの研究」

（３）　目的

伊勢志摩同様に都市部から離れた地域における地方創生に資する取組を学ぶとともに、同世代である他高校生らによる地方創生に資する取組を学ぶ。

（４）　研修内容

地元である伊勢志摩地域は、「伊勢神宮」の恩恵を受け観光客には恵まれる地域であるが、人口減少や少子高齢化、過疎化の進行が地域課題であるため、伊勢神宮の他にも自然を活かした地域活性化につながる企画を考える必要がある。今回の研修においては、自然環境を活かしたエコツーリズム・グリーンツーリズムの成功事例を学ぶため、夏季休業を利用したマレーシア海外研修を計画し進めて来たが、昨年度からの新型コロナウイルス感染症の拡大影響により、計画を変更し、国内における成功事例や取り組みを研修とする計画を再度考えることとなった。私たちの班は、伊勢志摩同様に都市部から離れた地域における地方創生に取り組む秋田県湯沢市を研修場所とし、9月に訪問することを計画した。しかし、直前になっても新型コロナウイルス感染症の拡大が止まない状況から、国内で予定した研修をすべて中止として、県内での活動に計画変更を行い実施することとなった。

ア　事前学習（オンライン）

（ア）　実施日

令和２年９月２４日（木）

（イ）　内容

この事業における観光教育アドバイザーである、東北大学大学院助手の三橋正枝さんによるオンライン事前学習を実施した。

県内活動になったことから、実施計画の確認と進め方について相談を行った。その際、「なぜ、今回の研修に参加したのか。各自が何を目的に活動を行うのか。」など、活動の意義について問われ、地元地域の過疎化が深刻な問題になっていることや、観光を通して地域を活性化したいなど、それぞれの思いや今回の活動への意欲を伝える場となった。

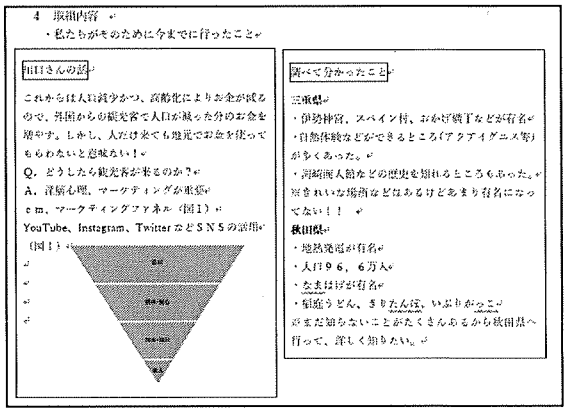
イ　三重県観光連盟　川口政樹さんによる講演

（ア）　実施日

令和２年１０月２９日（木）

（イ）　内容

三重県観光連盟の川口政樹さんを講師に招き、「三重県における観光」について講演会を実施した。伊勢の地は、伊勢神宮があり観光客は少なくはないが、日本の人口が減少する中においては、外国人観光客を呼び込む努力が必要となる。ただし京都のように、観光客が増えすぎる「オーバーツーリズム」が問題となってはいけないなど、経済的側面だけを考えた取り組みを行うと本来の生活に支障が出る場合もあると知った。また、多くの人に認知されるための方法はＳＮＳが有効であり、少ない予算でも効果的な発信が出来ることも学び、自然環境を生かしたエコツーリズムを考える上で参考となった。


4　取組内容
・私たちがそのために今までに行ったこと

川口さんの話

これからは人口減少かつ、高齢化によりお金が減るので、外国からの観光客で人口が減った分のお金を増やす。しかし、人だけでも地元でお金を使ってもらわないと意味ない！

Q．どうしたら観光客が来るのか？

A．洗脳心理、マーケティングが重要

ｅｍ、マーケティングファネル（図1）

YouTube、Instagram、TwitterなどＳＮＳの活用

（図1）

調べて分かったこと

三重県

・伊勢神宮、スパイン村、おかげ横丁などが有名

・自然体験などができるところ（アクアイグニス等）が多くあった。

・浜島海人館などの歴史を知れるところもあった。

・きれいな場所などはあるけどあまり有名になってない！！

秋田県

・地熱発電が有名

・人口９６，６万人

・なまはげが有名

・稲庭うどん、きりたんぽ、いぶりがっこ

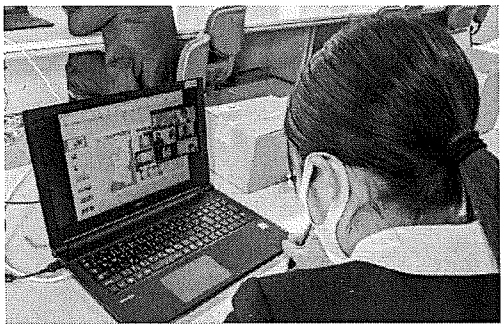
まだ知らないことがたくさんあるから秋田県へ行って、詳しく知りたい。

ウ　オンライン湯沢市秋ノ宮イベント

（ア）　実施日

令和２年１２月１１日（金）

（イ）　内容



秋田県湯沢市秋ノ宮を会場にしたオンラインイベントに参加した。司会をＮＰＯ法人こころゆたかの菅善徳さんと三橋正枝さんが努めイベントが始まった。

秋ノ宮の地名の由来は「秋田」と「宮城」の境目だったことから名付けられた。稲庭うどんやせりの産地として有名である秋ノ宮の豊かな自然や温泉、伝統文化や郷土料理についてオンラインの映像を見て学んだ。イベントには東北大学や宮城大学の学生、鹿児島県沖永良部高校の生徒も参加し、「心豊かになるためにはどう過ごしたらいいのか・・・？」をテーマにし、意見交換など交流を深めることも出来た。また、事前に送付された秋ノ宮の特産物を手に取りながらイベントに参加することで、秋ノ宮を近くに感じた。

このイベントは、Narative Approachの手法を取り入れたもので、映像を通して秋ノ宮を知り、話を聞き、特産品を手にとってその地域をイメージすることで、生徒たちは秋ノ宮を特別な場所に感じるようになっていた。

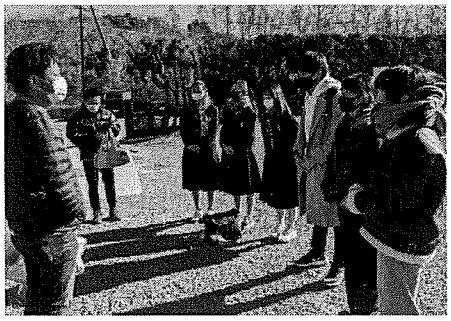
これからの観光を考える上では、今まで行ってきた形態では成り立たなくなることが想定されるため、Narative Approach活用して地域の魅力を有効に発信する手法として来年度の取り組みに活用を考えたい。

エ　グランピング体験（グランドーム伊勢志摩）

（ア）　実施日

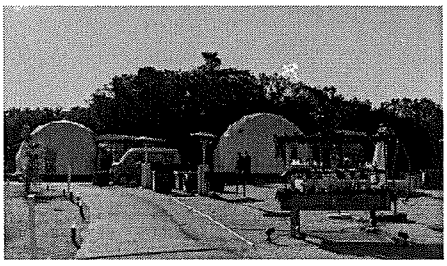
令和３年１月８日（金）～１月９日（土）

（イ）　内容



志摩市にあるグランドーム伊勢志摩において、施設を立ち上げた経緯や経営方針について、経営責任者の上原康介さんに話を聞くと共に、敷地内の施設見学と、グランピングを体験した。

グランピングとは２００５年頃イギリスで生まれた「グラマラス」と「キャンプ」の造語であり、自然を優雅に満喫する、非日常的で豪華なキャンプのことである。日本で最初のグランピングは、星野リゾート「星の家」が始まりとなる。



伊勢志摩地域は、海と山の自然豊かな地域であり施設の周りも国立公園に指定されており、エコツーリズムを企画するには魅力的な場所である。しかしエコツーリズムを観光ビジネスとすると、ゴミの問題や土地開発など環境保護との両立が難しいことも知った。年間約２万人が利用するグランドーム伊勢志摩では、過疎地で高齢者が多く残る地域の活性化を図り、地産地消の考えから地元食材の活用、雇用も創出し地域に貢献することをコンセプトとして事業に取り組んでいる。グランピング体験をとおして、生徒たちは、地元地域において持続可能な取り組みを考える上で、とても参考となる体験となった。

オ　新型コロナウイルス感染症の影響により中止となった計画

・高校生地域創生サミット：

高校生が地方創生や地域活性化の重要性について理解し、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を身につけることが目的として、飯南・飯高地域の資源や特色を活かした自分らしく生きている地域の人々の仕事ぶりを見学するフィールドワークや、後日に参加者がオンラインにより、地域課題を検討し課題解決の対策を発表する。

・アクアイグニス菰野見学

２０１２年に複合温泉リゾート施設として「癒し」と「食」をテーマに開業し、多くの観光客を集客するアクアイグニスの魅力と、歴史や創設までの経緯について、株式会社アクアイグニスの古田悟朗さんから学び、地域活性化の取り組みに活かす。

・海島遊民くらぶ　視察プログラム体験

鳥羽市においてエコツアーの企画・運営や観光情報の発信、観光・地域づくりに関するコンサルティングを行う「海島遊民くらぶ」が、地域との和を創造する最も大切な考え方を理解したり、さらに持続的な意欲につながったりするきっかけを目的として実施する視察研修プログラムへ参加し、エコツアーを企画する側の視点で体験することで、観光客へ効果的なアプローチについて学ぶ。

（５）　参加生徒の声

この取り組みに参加して、私たちの知っている伊勢志摩の当たり前が、他地域の人から見たら特別なものであることを認識することが出来た。伊勢志摩の魅力を知ってもらうことや、その魅力を発信してたくさんの人に興味を持ってもらうことの難しさも学んだ。情報を発信するのはＳＮＳの利用が効果的であるため、高校生の発信が重要になってくることも学び、自覚を持って少しでも地域活性化に貢献したいと思った。

貴重な体験をとおして、いろいろな視点で物事を見て考えて行動することの大切さを学んだ。地域を活性化することは簡単ではない、考えるだけでなく実行していくことはとても難しいが、何事も楽しみながら取り組んでいきたいと思った。１年間楽しみながらＳＤＧｓを学んでいくことができた。

（６）　成果と課題

生徒の声にもあるように、地元伊勢志摩の魅力を再認識する取り組みとなった。伊勢志摩地域の魅力をどのように発信していくことが、地域活性につながるかを検証していく必要があるが、高校生の発信力を活用することが効果的であることも確認出来たことから、来年度の取り組みとして「情報発信」に意識をもった取り組みとしたい。

コロナ禍により予定していた企画が実施出来なかったことがとても残念であるが、その中でも研修に参加した生徒が、成功事例や考え方を学び、多角的に地域課題を見ることの大切さを知ったのは大きな成果だったと思う。これらのことを次年度の研修にも行かせるように企画していきたい。

３　Ｃコース

（１）　参加生徒

２年２組商業科　堂東直矢
２年５組国際科　井坂詩
２年５組国際科　福田遙空

（２）　研究テーマ

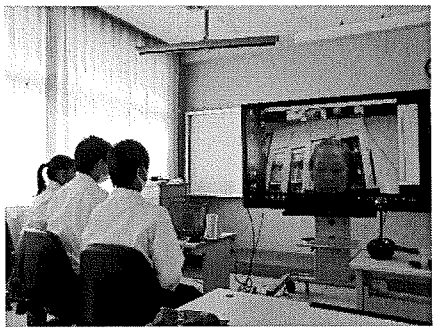
「ＳＤＧｓ推進まちづくりと地域の自然を生かしたグリーンツーリズムの研究」

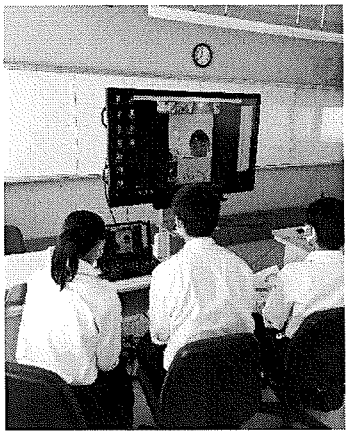
（３）目的

ＳＤＧｓの理念に基づいた、自然資源を生かしたグリーンツーリズムなどを利用し、地方創生を目指した取り組みを学ぶ

（４）研修内容

ア　鹿児島県和泊町総合進行計画会議に参加





共に参加する鹿児島県立沖永良部高等学校の生徒２名と交流。和泊町が目指す「暮らしを取りまく環境問題」、「持続可能な社会に向けて」、「暮らし方を見直す」、「心豊かな人が暮らす町へ」の計画について東北大学三橋様より和泊町が抱えている課題や今後の計画についてレクチャーを受ける。全体ミーティングでは和泊町振興計画の各プロジェクト担当から進捗状況の報告。報告の中で、休日の過ごし方について午前中に生徒と共に会話をした内容が話題になり、年代や時代背景により休日の過ごし方や楽しみ方に違いがあることを理解し、振興計画においてもここにいる大人だけの意見でなく、高校生等の意見も大切にしていこうという話もでた。鹿児島大学澤田教授から小中学校の給食について、どのくらい沖永良部島以外のところから食材を仕入れているかを見せていただいた。ほとんどが島外のものばかりであること、前回の台風９号、１０号ではスーパーに食材がほとんどなくなったことから、島内で自給自足できることが大切であることを知る。その後、個別ミーティング（みへでぃろプロジェクト）に参加。軽トラマルシェを開催した際には６００人ほどの来客があり、島の特産物や自分で作成したＴシャツや絵を売っている人もいて、次回は何がどれだけ売れたかの把握もする。澤田教授は、島内で養鶏場をつくり卵を作っており、えさ代などの課題がまだあるということを知った。また、地元で扱っている使っていない資源、廃棄されるものをどう使うかも大切であることを知った。

イ　鳥羽リサイクルパーク

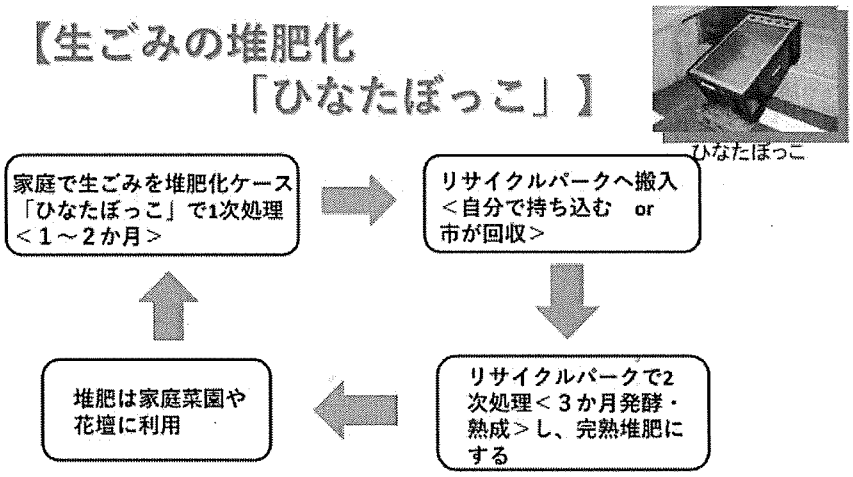
家庭から排出される生ごみの発生抑制をし、リサイクルすることで資源循環型社会の実現を目的として建てられた施設であることを知る。そのためリサイクルごみステーションや紙リサイクルステーションを設置し、生ごみの堆肥化の取り組み、環境講座なども行われていることを聞き、その後、施設を見学させていただいた。

（生徒の感想）

・リサイクルごみステーションには、ビン、ペットボトル、金属、蛍光灯、紙類、布類、電池、廃油、発泡スチロールなど様々な種類のゴミを持ち込めることを知ったこと、公園をイメージして作られたスペースなので、個人や家族連れで気軽に持ち込めるようになっていることに工夫がされていることに感銘を受けた。

・小さなこともＳＤＧｓにつながるということを学びました。給食・食事を残さず食べることや旬のものを食べること、また、使わなくなった衣類や食器、本などをリサイクルセンターへ持って行くことなど、私たちの生活に密接していることばかりでした。そして、「私たちにできることは無限にあるんだ」と知り、これから取り組んで良くしていこうという希望も感じましたが、反対に、一部の人だけが取り組んでいても世界はよくならないのではないか、また、２０３０年までにＳＤＧｓは達成できないのではないかと不安も感じました。

ただ、授業の一環で話だけを聞くのではなく、実際に見て経験した私たちは、世界の現状の深刻さを周りの人々により進んで発信し、伝えていかなければならないと思いました。

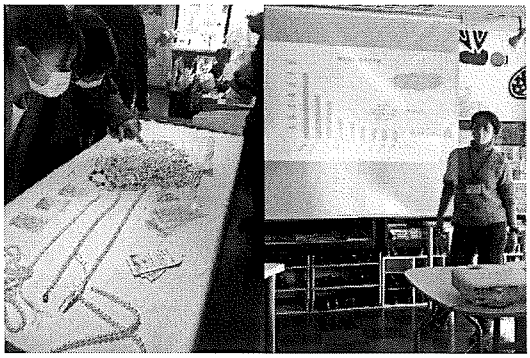


ウ　海島遊民くらぶ

「鳥羽の台所つまみ食いウォーキング」を体験。事務所周辺を歩いて地元の方から様々なお話を聞かせていただきながら、つまみ食い経験した。特に印象深かったのが、明治元年創業の「すし梅」で大将からお聞きした職人の技、信念が印象的であり、９４歳になってもたくましく生きられている姿に勇気をもらった。

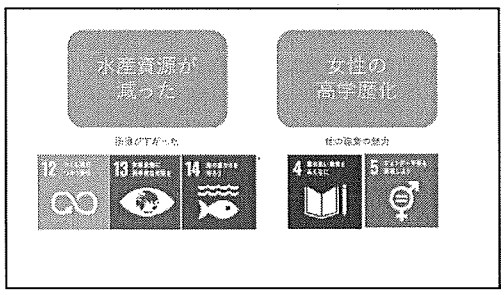
つまみ食い体験後、海島遊民くらぶ代表の江崎喜久様より持続可能な観光、ＳＤＧｓについて講話をいただいた。パラオの元大統領が伊勢市出身の方であることから交流

があり、小さな国がどのように自立していくか、環境問題などの課題をどう解決していくかを聞き、ＳＤＧｓに合わせて話をするよりも地域の課題をどう解決していくか、の後にＳＤＧｓに合っていたという考えで良いことを学んだ。



また観光業については、もしも自分が魅力に感じる無人島にお客さんを連れていくにはどうすれば良いか、というテーマから島の魅力を理解することや様々な課題（漁師さんに手伝ってもらうことやどのような手段で島までいくかなど）がみえてくること、そこから課題をどう解決するかを考えることができることを学んだ。また、気候変動によりアワビが捕れなくなり、海女さんも減り、海藻も減っていく現在の状況において、課題は気候変動だけでなく、海女さんにならずに違う仕事を選ぶこと、すなわち女性の高学歴化もあげられていた。水産資源が減ったことと女性の高学歴化からＳＤＧｓに絡めて考えることができた。変化していく時代や環境に対し、どうバランスをとるか。ＳＤＧｓのゴールを考えたときに、海女さんは必要か？アワビを捕れなくても良いのではないか？等の質問を投げかけられ物事の本質を考える機会となった。

また、持続可能な観光を考える上でお金を儲けること、儲けたお金をどうするか、地域に還元すること、お金が回らなくなれば、地元のお店も潰れてしまう。お金を儲けて地域に還元することは地域の資源を守ることにつながることが大切であると学んだ。



４　Ｄコース

（１）　参加生徒

２年２組商業科　　小寺帆乃華
２年３組商業科　　濵口怜美
２年４組情報処理科　幸田凜花
２年４組情報処理科　柴山ひなた

（２）　研究テーマ

「農業とＳＤＧｓ」

（３）　目的

ＳＤＧｓを達成するために自分たちにできることは何かを考え、沢山の人たちと考えを共有する。

（４）　研修内容

ア　オンライン講義

（ア）実施日

令和２年10月29日（木）

（イ）内容

オンライン（ZOOM）にて、有機栽培の専門家で農林水産省６次産業化プランナーをされている(株)プラスリジョン代表取締役の福井佑実子さんに、第一次産業（農

業）を中心としたＳＤＧｓの達成に向けた取組や、オーガニック食材と自然との関わりについて講義をしていただいた。

イ　丹波研修

（ア）実施日

令和２年 11 月 28 日（土）～29 日（日）

（イ）研修先

・(株)プラスリジョン（兵庫県丹波市柏原町）

・橋本有機農園（兵庫県丹波市市島町 1）

・婦木農場（兵庫県丹波市春日町）

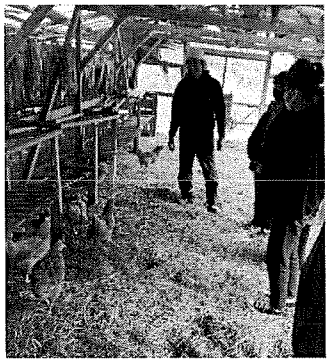
（ウ）内容

①（株)プラスリジョン　ORGANIC HOUSE　訪問

(株)プラスリジョンを訪問し、福井佑実子さんから 10 月 29 日に実施したオンライン講義の振り返り指導をいただいた。また、丹波市で採れた有機食材を使用した「おばちゃんの店」の昼食を食べながら、今回の研修先についてレクチャーを受けた。

② 橋本有機農園 見学

有畜複合農業を実践する橋本有機農園の橋本慎司さんに、持続可能な農業に向けた取組についてお話を伺った。また、食べ物だけでなくエネルギーの自給をめざす有畜循環型の農場の見学を行った。



平飼いの鶏舎

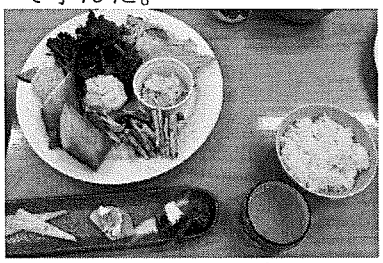
鶏舎では、平飼いの様子を見学し、モデルを使ってケージ飼いとの違いについて説明を受けた。橋本有機農園の鶏舎は一般的にあるような独特の臭いは全くなかった。鶏が草の上でフンをすることにより、自然の菌が発酵して自然の肥料となり、鶏自身が土を掘り返すことでフカフカで臭わない土壌となるのだそうだ。また、鶏の腸内環境を整えるために、賞味期限切れの牛乳を無償で譲り受け、ヨーグルトを作り、エサに混ぜていた。余ったヨーグルトは畑の肥料として使っており、有る物を無駄なく活用していた。

鶏エサ用のヨーグルト

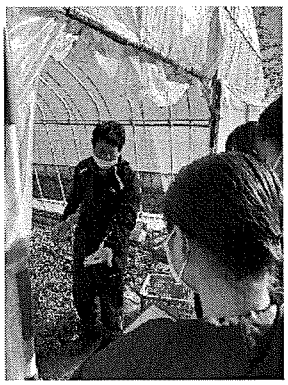
畑では、多品目の野菜を育てていた。野菜によって害虫の種類が異なるため、１種類の野菜だと害虫による被害は甚大だが、多品目を共に育てることによって野菜が互いに害虫から守り合っているのだという。様々なものとの共存について学んだ。

③ 婦木農場 見学・体験

婦木農場は江戸時代から代々続く農家で、「今、農村はおもしろい！」のキャッチフレーズで、家族で農業を営んでいる。農薬不使用の紙マルチ栽培米、黒豆や小豆、平飼い卵、飼っているジャージー牛の乳を使ったチーズ、年間 100 種類以上の野菜などを作っている。飼っている鶏や牛のフンでできた堆肥を使って土を肥やし、野菜などを作る、循環型農業を実践している。



28 日の夕食



ハウス栽培の小豆

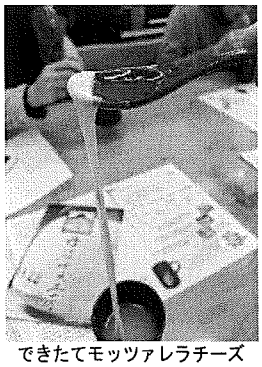
11 月 28 日の夕食は、婦木農場で採れたものを使ったメニューだった。この中で農場で作っていないのは春巻きの皮とキノコだけだという。食卓を囲み、婦木さんから農場についてお話を伺った。この週末の気候なら、近くの黒井城跡で雲海が見られるかもしれないと教えてもらい、翌日早朝、出かけることにした。

11 月 29 日朝６時に農泊施設を出発し、黒井城跡に向かった。婦木さんが言われたとおり、すばらしい雲海が見られた。農家は長年の経験から、空を見て天気予想をするのだそうだ。

朝食の後、農機具庫や牛舎、ハウス栽培の小豆、畑の多品目野菜など、農場の見学をしながら説明を受けた。ここでの牛舎も、嫌な

臭いはしなかった。
　昼食は農場で採れたものを使って、婦木さんに教えてもらいながら生徒たちが調理体験をした。その他、飼っているジャージー牛の乳と自家培養している乳酸菌を使ったモッツァレラチーズ作りの体験もした。

（５）　参加生徒の声


できたてモッツァレラチーズ

・寒くて大変だったけど、たくさんの人からいろいろな話を聞けてよかったし、体験できて楽しかったです。にわとりや牛や野菜や米など、調べるだけでは分からなかったことをたくさん知ることができました。環境のことを考えて育て、持続可能にするために気をつけていることが農業とSDGsに関係しているのだと思いました。昔から、周りの人に何を言われても農業を続けてこられたのはやはりすごいと思いました。２日目の朝の山登りは大変ですごく疲れたけど、雲海も見られたし、日が出てきたときはとてもきれいでした。山上にいた人みなさん親切でとても楽しかったです。この２日間でたくさん勉強できました。
・初めて兵庫の丹波市に行き、温かい人と出会い、実際に持続可能な農業の生活をしている人の話を聞いて、見て、本当にいい体験ができて良かったです。これから学んだ事を少しでもたくさんの人に知ってもらうために発信していきたいです。
・プラスリジョンの福井さんとリモートで話していましたが、やはり自分で足を運んで実際に見たり、食べたり、経験させてもらうことで、より明確に仕組みを知ることができました。コロナウィルスでどうなることかと思っていましたが、やっぱり行けて良かったなと思います。農業を営んでいる方々の話を聞いていると、「最初はとても反対された」という部分が共通していました。今、成功しているのは、このような声の中、自分のやりたいことを諦めず頑張ったからだと思います。これは農業だけでなく、普段の生活とも結びつけることができるから、これから自分の意思とチャレンジ精神、継続力を身につけて過ごしたいです。
・橋本さんも婦木さんも、まわりとは違うことをしていて、批判や偏見が多くあったと言っていた。そんな中でも、こだわりを持って続けていくのは本当にすごいと思った。今まで、自分はどんどん新しいことを取り入れていくことが大切だと思っていたが、昔ながらのやり方や道具を使うことで持続可能につながる場合もあることが分かった。どの方もくわしく、丁寧に教えてくれ、とても勉強になった。自分ももっと知っていかなければいけないし、それを共有していかなければいけないと思った。

（６）　成果と課題

　この研修で、有機農業発祥の地と言われている丹波市で、循環型農業について学んだ。丹波市では地域支援型農業（ＣＳＡ）という仕組が普及している。農家が安心して有機農業をできるのは、高価でも安心安全な作物を購入したいと考える消費者との提携体制があるからだという話を伺い、消費者意識の課題にも気づくことができた。持続可能な農業とは、農薬を使わない昔ながらの農業に戻すということではない。無駄をなくし、必要な技術は活用し、共生を考えることが重要なのだとわかった。
　また、橋本有機農園を訪問した際、フランス人研修生が作業をしていた。この農園は、ＷＷＯＯＦ（ウーフ）という、有機農場のホストとそこで学びたいと思っている人をつなぐサイトに登録しており、常に外国人研修生が滞在しているのだそうだ。橋本さんは流暢な英語で研修生に作業の指示をしており、本校の生徒たちにも英語の重要性を説いてくれた。また、国内外を問わず訪問者はその土地のことについて聞きたいはずであるから、まず地元について知ることは必須であるとお話いただいた。丹波の地に根付いて活躍されている方の、世界とのつながりを目の当たりにした。
　この研修を経て、参加生徒はここで学んだことを持ち帰り、たくさんの人に伝え、思いを共有したいという次の課題を見つけた。熱い思いをもって循環農業に取り組む大人との出会いは参加生徒の成長に繋がったといえる。今回の参加生徒が次年度の商業科目「課題研究」をはじめとする様々な学習活動において主体的に課題解決に取り組むことを期待する。